『言語情報学研究報告』No.10（2006）

日本語学習者言語研究に向けての基礎調査

古川　明子
（東京外国語大学大学院博士前期課程）
協力：鈴木　綾乃
（東京外国語大学大学院博士前期課程）

はじめに

本稿は第二言語としての日本語学習過程において現れた学習者言語について，誤用分析および中間言語研究としてなされた先行研究を概観し，文献一覧の形にまとめた資料集である。今後，日本語学習者言語の研究を行う上で，参考文献の検索，調査方法やデータ収集についての検討などの際にも役立つと思われる。

外国語学習において，学習者がどのように言語を習得してゆくのか，いかなる方法をとれば言語教育がより速く円滑に進むのかといった素朴な疑問は，外国語を学んだ経験を持つ者や教える場に立つ者にとって，常に身近である。そうした疑問を解決するために数多くの理論や仮説が展開され，実証的研究が行われてきた。第二言語習得研究に興味を持つとき，先人たちの果敢なる論法は後を追う者の興味をさらに深めるものと言えよう。

1　学習者言語について

1.1　学習者言語の定義

学習者言語とは「学習者が，話しことば，書きことばを問わず，第二言語を使用しなければならない状況で表出することば」（Ellis 2003，牧野訳）と定義される。第二言語を学ぶ際に学習者はさまざまな誤用を生み出しながら目標言語を習得してゆく。習得過程にある学習者の言語を知ることは言語教育および言語研究に携わる者に多くの情報を提供する。

個々の学習者は場面によって多様な誤用を生み出すが，そうした誤用は学習者に共通して見られ，その特徴を検討してゆくと共通項を持つ体系が浮かび上がってくることが明らかとなっている。

学習者の作り出す誤用を含めた言語を体系的なものと捉え，母語でも目標言語（Target Language）でもなく学習過程において現れる中間的な言語すなわち中間言語(Interlanguage)と呼ぶ。

Corder は学習者の誤りについて次のように述べている。

…we can regard the making of errors as a device the learner uses in order to learn. It is a way the learner has of testing his hypotheses about the nature of the language he is learning.　(Corder, 1967:167)

誤りをおかすことは学習のためのひとつの方策とみなすことができる。学習者は学んでいる言語がどのようなものであるか，まず仮説を立ててそれを試すときに誤用という方法をとるのである。

また，中間言語という命名をしたのは Selinker である。

…a separate linguistic system based on the observable output which results from learners' attempted production of a TL norm. This linguistic system, we will call "interlanguage". (Selinker, 1972:213)

観察されるアウトプットに基づいたひとつの言語体系があり，それは目標言語の規範に従って学習者が産出しようとしたものである。この言語体系を中間言語と呼ぶ。

その後，中間言語という語は各方面の研究者によって用いられてきた。ただし，その意味するところが研究者の間で必ずしも一致していなかったという経緯もある。一方，学習者言語という語は広く一般的な概念として，学習者の産出する言語を意味する語として使用されている。

1.2　先行研究の概観

Corder(1967)の 'The Significance of Learners' Errors' が第二言語習得研究のさきがけと言われる。それまで学習の際の誤用は生み出さない方が良いものとされ，いかに目標言語に近づけるか，いかに誤用を少なくするかに力点が置かれていた。しかし Corder は誤用を学習過程で当然出てくるものであり通るべき道筋であるとして，分析の対象としたのである。

誤用分析が進められるようになり，そこに学習者の心理的プロセスが表れていることや，学習者がどのような状況でいかなるストラテジーを採択したか等，多くを読み取ることができるという実態が明らかになってきている。

また，誤用だけ見ていたのでは難しい表現を回避した場合その表現が使えるかどうかは表れてこない。そこで誤用のみに注目するのではなく，学習者言語を学習過程の中間的位置にある中間言語という形で捉えようとする方向へ研究の流れが進む。

誤用とは目標言語との違いから正しくないと判断されたものであるが，中間言語は全体像として捉えられ，そこに自律的な体系を見ようとするものである。また学習過程にある者の言語という意味で学習者言語と捉えることができる。

第二言語習得（SLA）研究の発展により種々の視点から見た学習者言語の実態が明らかになってきている。たとえば形態素習得順序（acquisition order）についての研究が進められ，特に 1970 年代には英語の形態素習得順序についての種々の研究結果が明らかにされた（Dulay & Burt:1973，Krashen:1977）。学習者が様々な文法項目をどのような順序で習得していくかに関して解明がなされている。

また一方で発達順序（developmental sequences）の研究も行われた。これはあるひとつの学習項目がどのような過程を経て習得されていくかを見るものである。たとえば Schumann(1979)では否定文の学習において no＋verb の段階を経てから正しい形の習得へと移るということを明らかにしている。

Ellis(1985)では，習得モデルや習得理論についての概説が論じられている。さらにEllis(1994)は学習者言語の諸相やさまざまな研究について詳しく述べている。

（以上文中の参考文献）

Corder, P.(1967)The significance of learners' errors.*International Review of Applied Linguistics* 5

Dulay, H. and M. Burt(1973) Should we teach children syntax? *Language Learning* 23/2

Ellis,R.(1985)*Understanding Second Language Acquisition*. Oxford: Oxford University Press.

Ellis, R.(1994)*The Study of Second Language Acquisition.* Oxford: Oxford University Press.

Ellis, R. 牧野髙吉訳(2003)『第二言語習得のメカニズム』筑摩書房

Krashen, S., J. Butler, R. Birnbaum, and J. Robertson(1978) Two studies in language acquisition and performance. *Language Learning* 28

Schumann, J.(1979) The acquisition of English negation by speakers of Spanish. A review of the literature. In Anderson(ed.), *The Acquisition and Use of Spanish and English as First and Second Languages*:3-32. Washington D.C.:TESOL.

Selinker, L.(1972) 'Interlanguage'. *International Review of Applied Linguistics* 10

1.3　学習者言語研究の方法

学習者言語は SLA のメカニズムを解明しようとする研究において，多くの情報を研究者に提供するものである。

学習者言語の横断的研究により，誤用の類型を見ることができる。また縦断的研究（ある学習者について時間を追って観察するもの）によって発達の過程を知ることができ，また学習者言語そのものの多様性（たとえば同じ学習項目について誤用と正用が同時期に観察される等）を見ることもできる。さらに学習者がどのような言語行為を行い，それをいかに習得してゆくかを語用論の見地から検討することも可能である。

さらに，学習者言語が教室活動等の学習において現れたものか，あるいは自然な環境の中におけるものかといった視点からの比較もされている。

これまでに行われてきた研究について詳しく見てゆくと，まずデータとしての学習者言語を多数集め，統計学的分析を行って結果を示しているものがある。それによって単にデータ数値の一覧を見た場合よりも内容の特質がつかみやすくなる。たとえば標準偏差の値の提示はデータに見られる傾向における個人差の有無を読み取る上で貴重な情報源となる。使用する統計デザインはカイ２乗検定・ｔ検定や，分散分析・因子分析など各種から選ぶことになるが，調査および期待される結果にふさわしいものを選択し，調査を始める前の段階から綿密な計画を組む必要がある。

他方，学習者言語に現れた誤用文をひとつずつ取り上げ，それに対する正用の可能性として複数の例を挙げるという方法で誤用分析を行っている研究もある。語彙の意味の厳密

な使い分けは母語話者でも時として曖昧さを抱え持ち，また複数の母語話者で比較しても揺れのある場合もあるが，こうした研究の中に提示された正しい用法は次代に伝える日本語として見た場合にも大変意義深い内容となっている。

1.4　日本語教育における学習者言語

SLA 研究は外国語学習について特に英語圏で数多くの研究が行われ，多彩な理論を生み出してきたことが知られている。

そうした研究を踏まえ，日本語教育の分野でも学習者言語を対象に調査分析が活発に行われてきている。研究成果は教育面の発展，たとえば教材開発やカリキュラムの作成に生かされてきた。また直接的かつ具体的な貢献のみならず，日本語学習者を対象にした研究から習得のメカニズムを探ることの意味は大きい。

また，誤用分析の目的は SLA 研究ばかりではなく，日本語学習者の語彙の用法やコロケーション（連語）の誤りから，日本語の語彙自体が持つ意味の揺れや変化の可能性を探るといった意図での研究も見られる。さらには言語学や日本語学に関わる分野でも，日本語教育に携わった研究者が学習者との接触を通して学習者言語に触れ，日本語の持つ文法その他の特質について数多くの発見を重ねている。母語話者でない学習者がどのような学習過程を経て習得するかを知ることは，日本語自体の研究にとっても大きな意味を持っていると言えよう。

ここで具体的な研究例について幾つか見てゆきたい。

誤用の判定については，長友・迫田（1987・1988・1989）に規範的な方法が提示されている。この研究は学習者の作文の誤用分析を通して，日本語の文法体系と学習者によるその習得過程を明らかにしようとの目的で行われ，同(1987）では誤用の判断基準と方法を示し，分析の結果とその検討を提示している。同（1988）では方法論的枠組について述べ，特に文文法・談話文法という規範が誤用の判断と正用文の再構築に関わっている点について分析表を多数示しながら詳しく述べている。同（1989）の分析結果についての考察では使用文型と文節数の違い，動詞「て」形，形容詞過去形，助詞「が」「は」に注目し習得状況の観点から論じている。

誤用例に対する正用から日本語文の特質をつかもうとする研究の例として，森田（1985）が挙げられる。ここでは表現上の不自然さをも広義の誤用ととらえ，発想や文脈的意味にふさわしい文型を用いることが正用であるとする立場から，誤用例文について分析・解説し，提言を行っている。

誤用分析についてシリーズで雑誌に掲載されたものがあり，興味深い。一例として田窪（1987）は韓国語母語話者である日本語学習者の誤用を分析している。まず誤用の一般論に触れ，韓国語の影響によらない誤用を挙げ，その後，母語からの転移と見られる誤用について文法・語彙・発音・表記の面から述べている。その際，韓国語の音韻・文法の解説をも加えている。

1.5　今後の展望

学習者言語についての研究はさまざまな分野において有意義なものとなってゆくと思われる。日本語教育の分野において教材開発やカリキュラム，シラバスの作成に生かされるばかりでなく，基礎研究としても言語学や日本語学と結びついた広い視野に立つ研究が，学習者に対する調査という着実な積み重ねから広く展開してゆくことを心から願うものである。

2　学習者言語に関する実証的な研究の概観

本章では日本語学習者言語に関する先行研究のうち，実証的なものについて表の形にまとめる。それぞれの研究について「著者」「発表年」「調査地」「調査対象に関する情報」「調査方法」「調査内容」を一覧表にし，3 章においてどのカテゴリーに分類されているかを表す「学習者言語の領域」の項目を設けた。著者名の五十音順に示してある。カテゴリー別一覧の注釈とあわせて参照することが可能である。

No.	著者(発表年)	調査地	調査対象に関する情報			合計(人)
			レベル	出身または母語（人数）	社会的身分（人数）	
1	安 (1996)	韓国・日本	初級・中級・上級	韓国	学生	138
2	生駒/志村 (1993)	アメリカ	初級/3～10年	アメリカ(10)日本（10）	大学院生	20
3	石田 (1992)	フランス	初級・中級/1・3年次	フランス	学生	63
4	市川 (1988)	日本	初級		学生	28
5	市川 (1989)	日本			学生	(462文)
6	市川 (1993)	日本	中級	タイ（１）韓国（１）台湾（２） アメリカ（５）ブラジル（１）		
7	稲垣 (1976)	日本	初級・中級	アメリカ・イギリス・ドイツ・ ポーランド・フィンランド・ フランス・香港・台湾・韓国・ ベトナム・インドネシア	学生	64
8	稲葉 (1991)	日本、アメリカ	初級・中級		学生	45
9	遠藤 (1978)	日本	上級	ロシア	学生	10数名
10	大島 (1993)	日本	中級・上級	韓国（79)中国（92）	就学生	171
11	尾崎 (1981)	オーストラリア	上級		学生	3
12	尾崎 (1993)				学生	31
13	鎌田 (1992)	アメリカ、日本		英語(16)フランス語(7)ドイツ語 (7)中国語(5)韓国語(8)チェコ語 (1)ヘブライ語(1)アラビア語(1) インドネシア語(1)	学生	43
14	上條 (1989)	日本	初級	ベトナム	難民	
15	家村 (1993)	日本	中級・上級	中国語（55)韓国語(10) タイ語(3)英語(18)スペイン語(6) ポルトガル語(5)フランス語(2) ドイツ語(1)	学生	100
16	茅野/仁科 (1978)	日本		台湾・香港・インドネシア・ タイ・韓国・ベトナム・ペルー	大学生	
17	久保田 (1994)	日本	初級	英語	英語教師・技術者	2
18	黒野 (1995)	日本	初級	ベンガル語(3)中国語(6) タイ語(1)タミル語(1) ネパール語(1)シンハラ語(1)	学生	14
19	顧/徐 (1980)	中国		中国	大学生	
20	顧 (1981)	中国		中国	大学生	
21	顧 (1983)	中国		中国	大学生	
22	小金丸 (1990b)	日本				
23	小林典子 (1987)	日本		台湾(20)中国(52)香港(49)マカオ (1)韓国(29)マレーシア(23) アメリカ(6)スペイン(4)イラン (2)エジプト(1)ナイジェリア(1) インドネシア(1)フランス(1)他		(242文)
24	小林幸江 (1981)	日本	初級	モンゴル	大学生	2
25	小林幸江 (1983)	日本		モンゴル	大学生	6

調査方法	調査内容	学習者言語の領域	備考
調査用紙に記入	コソアの習得への母語の影響	指示詞コソアに関する習得研究	調査用紙は宋(1991) 金水 (1989)に基づき作成
談話完成テスト	プラグマティック・トランスファー	社会言語学・語用論に関する習得研究	
口頭表現をテープ録音		特定の母語話者に関する習得研究	
S-P表			教科書・文法指導への提言
作文	誤用（取立て助詞「ハ」について）	助詞に関する習得研究	科研費研究「外国人による誤用例の収集,整理,及び分析」(研究分担者寺村秀夫)のデータを使用
800字程度の作文	誤用（表記・文体・語彙・文法）	誤用分析研究一般	項目別誤用例数表
集団テスト法 条件文を提示 文の正否の識別を見る	条件文（と・ば・たら・なら）のモダリティ制約	その他の文法項目に関する習得研究	
作文	誤用（可能性とできる、接続表現、首尾の不一致、発想の違い）		
アンケート調査	モダリティ習得	モダリティや文末表現に関する習得研究	日本語母語話者のアンケート結果と比較
インタビュー	伝達能力（不確かさの表明確認・非言語化・簡略化・声量・やわらげ・応答・間投詞）	社会言語学・語用論に関する習得研究	
インタビュー	伝達表現の習得	その他の文法項目に関する習得研究	
主に作文	誤用	特定の母語話者に関する習得研究	ベトナム語の転移
アンケート調査	否定疑問文の応答	その他の文法項目に関する習得研究	日本語母語話者のアンケート結果と比較
作文	誤用（品詞別分類）	誤用分析一般	
書き資料（穴埋めテスト・日記等） 発話資料（対話タスク・ストーリーテリング等）	格助詞の習得過程	助詞に関する習得研究	
文法性判断テスト	テイル形の習得（動作の継続、結果の状態）		日本語母語話者30名に同テストを実施し、正答基準とする
作文・会話・翻訳	誤用（疑問詞用法・受身文）	特定の母語話者に関する習得研究	中国語との比較
作文・会話・翻訳	誤用（動詞・形容詞・代名詞など）	特定の母語話者に関する習得研究	中国語との比較
作文・会話・翻訳	誤用(格助詞・係助詞・接続助詞)	特定の母語話者に関する習得研究	中国語との比較
作文他	誤用（「のだ」についての誤用と非用）	モダリティや文末表現に関する習得研究	
作文、読解や聴解の要約など	誤用（「副用語」＝副詞/副詞的用法の形容詞/ナ形容詞/名詞+助詞/数量詞）	その他の文法項目に関する習得研究	科研費研究「外国人による誤用例の収集,整理,及び分析」(研究分担者寺村秀夫)のデータを使用
作文	誤用（助詞「に」「で」）	特定の母語話者に関する習得研究	モンゴル語との比較
作文	誤用（格助詞）	特定の母語話者に関する習得研究	モンゴル語との比較

No.	著者(発表年)	調査地	調査対象に関する情報			合計(人)
			レベル	出身または母語（人数）	社会的身分（人数）	
26	小林ミナ/カッケンブッシュ/深田(1991)	日本	初級後半	英語(アメリカ(22)・オーストラリア(1))	大学生	23
27	坂本(1993)	日本	準中級～上級	英語	大学生	82
28	桜井(1986)	中国	中級以上	中国	大学生	約100
29	迫田(1993b)	日本	初級・中級・上級	英語・中国語・韓国語・タガログ語他（22か国、18言語）	学生	60
30	迫田(1996b)	日本		韓国語・中国語	学生	6
31	迫田(1997a)	日本	中級・上級	中国語(20)韓国語(20)英語(20)	学生	60
32	佐々木/川口(1994)	日本	中上級	中国語(21)韓国語(8)英語(5)その他(6)	学生	40
33	佐藤(1984)	アメリカ 日本	初級	アメリカ	学生	
34	申(1985b)	日本		韓国	学生・主婦・教師・会社員他	92
35	鈴木忍(1978)	日本		主に東南アジア	学生	
36	鈴木智美(1999)	日本	初級～上級			285例+256例
37	鈴木智美(2002)	日本	中級			302
38	滝沢(1999)	日本	初級～上級	英語	学生	
39	田中(1991)	インドネシア		インドネシア	大学生	約50
40	田中(1997)	日本		JFL：英語(69)英語/中国語(5)韓国語(9)韓国語/英語(2)中国語(8)ドイツ語(4)ドイツ語/英語(1)デンマーク語(2)ロシア語(2)ギリシャ語(2)台湾語(2)ノルウェー語(1)スペイン語(1)フランス語(1)広東語(1)カンナダ語(1) JSL:英語(24) 広東語(5)英語/中国語(1)韓国語(4)ロシア語(1)フィリピン語(1)スペイン語(1)ドイツ語(1)	学生	112（JFL） 38（JSL）
41	田丸/吉岡(1994)	日本	初級	ベンガル語(４)ウルドゥ語(１)英語(１)	大学院生	6
42	長友・迫田(1987)	日本	初級終了	ウルグアイ(1)バングラデシュ(1)フィリピン(1)イラン(1)インドネシア(1)マレーシア(3)	学生	8
43	長友・迫田(1988)	日本	初級終了	レバノン(1)インド(1)チュニジア(1)マレーシア(2)タイ(1)ヨルダン(1)	学生	7

調査方法	調査内容	学習者言語の領域	備考
調査用紙に記入	英単語片仮名表記の日本語化規則	特定の母語話者に関する習得研究	外国語が日本語の体系に外来語として取り込まれる際の規則 個人テスト（口頭、漢字、文法、聴解）との相関を調査
集団テスト法	「て形」形成規則の習得	「て形・テイル」に関する習得研究	
作文	誤用(原形置換・直訳・余分・欠落・部分的誤り・訳語の選択の誤り、に分類)	特定の母語話者に関する習得研究	中国語との比較
インタビューをテープ録音	中間言語(正用・誤用を含む)としての指示詞コソア	指示詞コソアに関する習得研究	予備調査として日本語学習32名、日本語母語話者成人50名にアンケート調査 本調査対照群として日本語母語話者10名 母語の指示体系を二項対立と三項対立に分類
インタビューをテープ録音	指示詞コソア	指示詞コソアに関する習得研究	３年間の縦断的研究 （4か月ごとに8回インタビュー）
文法判断テスト	指示詞(コ系/ソ系)	指示詞コソアに関する習得研究	
課題作文	文末表現	モダリティや文末表現に関する習得研究	
作文・短文・手紙	誤用	特定の母語話者に関する習得研究	誤用例を14項目に分類
アンケート 追跡調査（アンケート・面接）	指示詞コソア	指示詞コソアに関する習得研究	来日年齢・学習開始年齢・滞在期間と誤用との関係
作文	誤用（格助詞）	助詞に関する習得研究	
作文	誤用（意味的なもの/語の漢字使用に関するもの）	誤用分析研究一般	データとして名古屋大学作文コーパスを使用
課題作文	誤用（語彙・意味に関わるもの）	誤用分析研究一般	初級段階で注意が必要な類義語句を提示
作文	誤用 （コロケーション）	誤用分析研究一般	英語のコロケーションとの対比
作文	受身	特定の母語話者に関する習得研究	インドネシア語を日本語に移すときの規則
文生成テスト	視点・ヴォイス・複文の習得	文構造・複文・接続表現に関する習得研究	
面接の録音 （絵を見て描写する等のタスク）	文構造 （縦断的変化）	文構造・複文・接続表現に関する習得研究	各人計6回の面接 （学習開始6週～18ヶ月、各学期毎） 分析単位：アタランス、T単位、S句
作文	誤用（文法習得）	誤用分析の方法論	
作文 和訳テスト・文型テスト	誤用（文法習得）	誤用分析の方法論	

No.	著者(発表年)	調査地	調査対象に関する情報			合計(人)
			レベル	出身または母語（人数）	社会的身分（人数）	
44	長友・迫田 (1989)	日本	初級終了	学習暦３か月：レバノン(1) インド(1)チュニジア(1) マレーシア(2)タイ(2)メキシコ(1) インドネシア(1) チェコスロバキア(1)	学生	10
				学習暦４か月：ウルグアイ(1) バングラデシュ(1)マレーシア(4) フィリピン(1)イラン(1) インドネシア(1)ヨルダン(1)	学生	10
45	長友 (1990b)	日本	上級		学生	26
46	長友 (1993)	日本	初級終了	スペイン語 — —	学生	1 20 4
47	西村 (1998)	ニュージーランド	中級	英語	大学生	31
48	野沢 (1985)			中国語		
49	野沢 (1986)			中国語		
50	菱沼 (1980)	中国		中国語	大学生・教師・通訳	
51	藤森 (1995)	日本	中上級	韓国（62）中国（49）	学生・公務員	111
52	細川 (1990)	フランス	初級後半～終了	フランス	大学生	33 (558文)
53	堀口 (1979)	日本			学生	20
54	松田/斎藤 (1992)	日本	初級	韓国	主婦	2
55	峯 (1995)	日本		アラビア語(1)フランス語(2) フィリピノ語(3)英語(１) ゾンカ語(1)韓国語(2)ベトナム語(１)中国語(6)ドイツ語(1) スペイン語(1)イタリア語(1) シンハラ語(1)タイ語(3)	学生	25
56	山田 (1992)	オーストラリア		英語	大学生 (日本語母語話者(2))	1
57	葉 (1990)	日本		オーストラリア(1)アメリカ(2) 他	学生他	8
58	横田 (1986)	日本		アメリカ	大学生・大学教員 およびその家族他	19
59	吉田 (1994)	台湾		台湾	大学生	135
60	吉光 (1981)	オーストラリア	中級・上級	オーストラリア	大学生	3
61	刘 (1984)	中国		中国	大学生	
62	渡辺 (1994)		初級・中級・上級	中国語・韓国語・英語		19

調査方法	調査内容	学習者言語の領域	備考
作文	誤用（誤用傾向、学習時間数の違いと習得過程の諸相の関係）	誤用分析の方法論	
調査用紙	「が」「は」の習得	誤用分析研究一般	日本語の誤用分析研究の発展過程および現状と課題の記述における具体例
作文	誤用・正用（形容詞過去形等）	誤用分析研究一般	日本の中間言語研究概観記述における具体例
手紙文（課題設定）	誤用（詫びの手紙文の適切性）	社会言語学・語用論に関する習得研究	日本語母語話者による日本語の手紙文（20名分）および英語話者の英語手紙文（15名分）と比較
作文	誤用（接続助詞）	特定の母語話者に関する習得研究	中国語との比較
作文	誤用（「～なる」）	特定の母語話者に関する習得研究	中国語との比較
対話・作文	誤用	特定の母語話者に関する習得研究	中国語との比較
談話完成テスト	「弁明」発話の節末・文末形式の使用状況	社会言語学・語用論に関する習得研究	日本語母語話者98名についても調査・比較
作文	誤用	特定の母語話者に関する習得研究	
作文	誤用	誤用分析研究一般	
発話資料（テープ録音、メモ	発話構造に係わる認知方略・格助詞使用状況	助詞に関する習得研究	６か月、計16回の観察場面
発話資料（録音）	文末表現の習得過程	モダリティや文末表現に関する習得研究	筆者との対話を８か月間、月１回録音
談話（テープ録音）	買い物場面のインターアクション	社会言語学・語用論に関する習得研究	
作文	「ノダ」の使用例	モダリティや文末表現に関する習得研究	
アンケート調査	ほめられた時の返答	社会言語学・語用論に関する習得	英語母語話者21名の英語、日本語母語話者20名の日本語について同調査、比較
作文 対話（テープ録音、文字化）	誤用（「て形」）	「て形・テイル」に関する習得研究	
インタビュー（録音、文字化 リーディング・テスト（録音）	アクセント	音声に関する習得研究	
		音声に関する習得研究	中国語との比較
インタビュー(録音)	あいづち（頻度・適切性）	社会言語学・語用論に関する習得研究	日本語母語話者との電話での会話の際、使用されたあいづち

3　学習者言語研究のための参考文献（カテゴリー別一覧・注釈付き）

ここでは日本語学習者言語に関する参考文献を項目別に分類し，内容紹介のための注釈をできる限り付した。この章で挙げた文献はおもに 2000 年以前に発表されたものである。

分類方法は主として迫田（1998）に拠っているが，さらにいくつかの項目が追加されている。また，長友（1993）は『日本語教育』34 号（日本語教育学会 1978）に掲載された誤用分析に関する 6 編の論文（遠藤織枝，茅野・仁科，佐治，鈴木忍，宮崎茂子，吉川武時）を，この分野の研究のとるべき方向性を示したものと位置づけている。それ以前に書かれた稲垣（1976）およびこれら 6 編は先駆的研究と言えるものであろう。

以下にまず学習者言語研究の分類を掲げ，続いて文献一覧を記す。

3.1　誤用分析研究一般
　3.1.1　誤用分析研究一般
　3.1.2　誤用分析の方法論
3.2　文法項目に関する習得研究
　3.2.1　助詞に関する習得研究
　3.2.2　指示詞コソアに関する習得研究
　3.2.3　「て形・テイル」に関する習得研究
　3.2.4　モダリティや文末表現に関する習得研究
　3.2.5　文構造・複文・接続表現に関する習得研究
　3.2.6　その他の文法項目に関する習得研究
3.3　特定の母語話者に関する習得研究
3.4　社会言語学・語用論に関する習得研究
3.5　音声に関する習得研究
3.6　第二言語習得理論の実証研究

なお，注釈末尾に付された【　】内の数字は，第 2 章の実証的研究一覧表における番号である。相互参照が可能となるよう，記してある。

3.1　誤用分析研究一般

3.1.1　誤用分析研究一般

稲垣滋子(1976)「外国人学生の「書く」ことによる表現力―作文の中の誤用例から―」『Annual Reports 1』国際基督教大学

日本語を習い始めて 4 ヶ月目の学生と 1 年 5 ヶ月以上の学生それぞれ 30 名ずつの作文について，誤用例を項目別に分類した上で示し，解説。指導上の指標を提示している。【7】

稲垣滋子(1985)「誤用分析(1)－(6)」『日本語学』vol.4　1 月号-6 月号 明治書院

学習者の日本語の誤用と母語話者の日本語使用状況を比較し，呼応，漢字の読み誤り・書き誤りの類型，不自然な表現，人間関係といった視点から分析している。

遠藤織枝(1978)「作文における誤用例―モスクワ大学での場合―」『日本語教育』34 号 pp.35-46　日本語教育学会

モスクワ大学から来日した学生の作文の誤用を「可能性」と「できる」，接続詞，首尾の不一致，発想法の違いの項目に分類し分析している。【9】

大曽美恵子(1986－87) 「誤用分析(1)－(6)」『日本語学』vol.5　9 月号 - vol.6　2 月号　明治書院

英語母語話者への日本語教授経験から，学習者の誤用について，終助詞「よ」「ね」・説明のムードを表す助動詞「のだ」・不自然な印象の会話・直訳するとずれが生じる表現・主語の問題・使役と使役受身・敬語を中心に論じている。

茅野直子・仁科喜久子(1978)「学生の誤用例分析と教授法への応用」『日本語教育』34 号 pp.57-66　日本語教育学会

留学生の作文やテスト，練習問題に見られた誤用を示し，分析と教授法を具体的に述べている。現在一般に使用されている「イ形容詞」「ナ形容詞」という名称を模索する経緯がうかがえる。【16】

佐治圭三（1978）「誤用例の検討―その一例―」『日本語教育』34 号　pp.21-34 日本語教育学会

ある学習者の作文をもとに文字・表記・意味・文法の誤り・表現の問題を取り上げ，検討。学習者の意図を類推し，少しずつ手直ししながら正用の可能性をていねいに解説している。

佐治圭三（1991）「誤用分析の一例」『日本語学』vol.10　2 月号　pp.26-33 明治書院

インドネシアからの留学生の手紙に表れた誤用文を取り上げ，正用文を示しながら分析している。日本語の文法や意味を詳しく解説する内容となっていて興味深い。

佐治圭三（1993）『外国人が間違えやすい日本語の表現の研究』ひつじ書房

日本語学習者の誤用について，間違えやすい項目を取り上げて分析の方法論を述べ，分析している。また，質問に答える形でて形，自他動詞，類義語の問題等について解説。他文献を参照しながらの定義や，日本語母語話者の例文許容度調査を使用した正誤判断等を用いた詳しい検討を加えている。

渋谷勝己（1988）「中間言語研究の現状」『日本語教育』64 号　pp.176-190 日本語教育学会

中間言語研究の歴史と最近の研究動向を概観し，中間言語の視点を第二言語としての日本語習得研究に生かすための示唆を述べている。

鈴木智美（1999）「意味的な誤用に見られる主な傾向―慣習的に定着した表現および類似の表現に関わる誤り―」『日本語学習者の作文コーパス：電子化による共有資源化』平成 8 年度～平成 10 年度科学研究費補助金基盤研究（A）(1) 研究成果報告書（研究課題番号 08558020）

名古屋大学コーパスとして構築された日本語学習者の書き言葉のコーパスから，意味に関わる誤用を検索し，コロケーションの誤り・適切な漢字熟語を使用していない例・類似表現による誤り・漢字使用に関わる誤りを提示。学習者の誤用傾向について分析している。【36】

鈴木智美(2002)「2000 年度中級作文に見られる語彙・意味に関わる誤用―初中級レベルにお

ける語彙・意味教育の充実を目指して―」『東京外国語大学留学生日本語教育センター論集』28 pp.27-42 東京外国語大学留学生日本語教育センター

中級レベル日本語学習者の作文について，語彙・意味に関わる誤用を分析し，日本語教育における語彙・意味教育の充実を図ることを目指している。特に初級レベルで注意が必要な類義の語句を挙げ，継続的な教育の必要性を説いている。【37】

滝沢直宏（1999）「コロケーションに関わる誤用―日本語学習者の作文コーパスに見られる英語学習者の誤用例から―」日本語学習者の作文コーパス：電子化による共有資源化』平成 8 年度～平成 10 年度科学研究費補助金基盤研究（A）(1) 研究成果報告書（研究課題番号 08558020）

名古屋大学コーパスの中から英語母語話者による作文を対象とし，コロケーションの上での誤用および不自然な表現を抜き出し，提示して分析。この種の研究においてコーパスが果たす役割の重要性についても述べている。【38】

田窪行則(1987)「誤用分析(1)－(7)」『日本語学』vol.6　4 月号 - 10 月号　明治書院

韓国語母語話者である日本語学習者の誤用を分析。まず誤用の一般論に触れ，韓国語の影響によらない誤用を挙げ，その後，母語からの転移と見られる誤用について文法・語彙・発音・表記の面から述べている。その際，韓国語の音韻・文法の解説を加えている。

中川正弘（1993）「作文の誤りと文体」『広島大学留学生センター紀要』3　広島大学留学生センター

母語による思考がかなりの程度に出来上がっている日本語学習者の場合，作文の直すべき箇所はほとんど言葉の表層にある。作文に露呈した習得状況を知り，以後の学習課題をそこに見出すべきである。作文の意義をこのように説き，添削の具体例を挙げている。レトリックと誤用の類似点や文体の意義も述べ，構造的誤用分析を提案している。

中川正弘（1994）「作文と解釈行為」『広島大学留学生センター紀要』4　広島大学留学生センター

作文の添削は解釈に通じるものであり，言葉の選択から全体性や文体にまで解釈という意識は当てはめられ得る。添削の具体例を示しながら学習者の誤用の意味とその解釈の可能性を探っている。

中川正弘（1995）「作文授業ガイダンスとしての作文経験調査」『広島大学留学生センター紀要』5　広島大学留学生センター

作文授業で行った作文経験調査アンケートの項目と結果を示し，日本語習得の上で効果的な作文指導のためには，書いたものについて考えさせる，あるいは考える訓練をさせることが必要であると述べ，言葉を通して日本語・日本文化を見る視点が望ましいと説いている。

中川正弘（1995）「作文の添削と文体差」『広島大学留学生教育』7　広島大学留学生センター

作文に対して複数の人による添削が行われた場合の違いを具体的に例示。添削が文の解釈に関わるものであり，客観性を期してもなお言葉や文体は個々人に備わるもの

であると説いている。
中川正弘(1999)「留学生の日本語作文データベース」『広島大学留学生センター紀要』9　広島大学留学生センター
中川正弘(2000)「スタイルから見る日本語文法」『広島大学留学生センター紀要』10　広島大学留学生センター
日本語にはさまざまなスタイルがあり，語彙の選択，文法，敬語，構文などにもそれは見られる。日本語学習においてはそのヴァリエーションを理解することで誤用・正用の枠を超えたより自然な日本語を身につけることができるであろう。これらの論点を具体例を挙げながら述べている。
長友和彦(1990a)「誤用分析研究：日本語の中間言語の解明へ向けて」細田和雅(編)『第 2 言語としての日本語の教授•学習過程の研究』平成元年度科学研究費補助金一般研究（B）研究成果報告書　pp.1-53
長友和彦 (1990b) 「誤用分析研究の現状と課題」『広島大学留学生センター紀要』第 1 号 pp.23-40 広島大学留学生センター
誤用分析の歴史的発展過程を概観し，日本語の誤用分析に関して 1970 年以降に書かれた 95 の文献を提示し，これらを含めた研究の方向性と位置づけを示している。またいくつかの習得過程研究を挙げ，自らの習得研究および習得モデル「系統的ヴァリエーション・モデル」について述べた上で，この研究分野の展望へとつなげている。【45】
長友和彦(1993)「日本語の中間言語研究」『日本語教育』81 号　pp.1-18　日本語教育学会
日本語の中間言語研究を概観するため，研究方法の具体例を示した後，世界の中間言語研究について歴史的発展の概略を提示。日本語の誤用分析・中間言語研究について最近の研究も含め文献を挙げながら解説している。【46】
長友和彦・法貴則子・初鹿野阿れ・登里民子・井内麻矢子・高橋紀子・広利正代 (1993)「縦断的第 2 言語習得研究：初級日本語学習者の中間言語」『平成 5 年度日本語教育学会春季大会予稿集』 pp.149-159 日本語教育学会
初級日本語学習者 4 名の中間言語（書き資料，音声資料）の発達過程について項目（音声，語彙，文法，社会言語能力）ごとに数値化。結果をもとに分析を行っている。
ネウストプニー•J. V. (1981)「外国人の日本語の実態 (1) :外国人場面の研究と日本語教育」『日本語教育』 45 号 pp.30-40 日本語教育学会
日本語学習者が実際に参加している日本語使用の機会を外国人場面という概念で捉え，その特徴を学習者の側と母語話者の側に分けて分析。日本語上達には外国人場面に含まれる問題の解決が不可欠という視点を示している。
水谷信子(1984) 「誤用分析(1)－(6)」『日本語学』vol.3　4 月号 - 9 月号　明治書院
英語を母語とする日本語学習者の誤用について，事実志向と立場志向，自己と他者のとらえ方の違い，部分否定と全体否定，終助詞「よ」「ね」による話題の共有，未来表現，構文と語彙，の視点から分析している。
宮崎茂子(1978)「誤用例をヒントに教授法を考える」『日本語教育』34 号　pp.47-56　日本語教育学会

誤用例の収集・活用の方法，誤用を直すための具体的ドリル，指導法などを示すことで，学習者の誤用に接しそれを教授法に生かす際の示唆を述べている。

宮崎茂子・新屋映子(1985-6)「誤用分析(1)－(6)」『日本語学』vol.4　11 月号－vol.5　4 月号　明治書院

文法と語彙の誤用を分析対象とし，日本語学習者の典型的な誤用，アスペクトの誤り，助詞・接続の誤りについて論じている。

森田良行(1983)　「誤用分析(1)－(6)」『日本語学』vol.2　6 月号 - 11 月号　明治書院

日本語学習者の誤用について，感情または感覚の形容詞に係る問題や文型選択上の問題，副詞の用法，さらに日本語そのものの非合理性から来るものなど，各視点に関して分析し，表現意図に応じた文型や語彙の選択ができるよう指導することが大切であると説いている。

森田良行(1985)『誤用文の分析と研究―日本語学への提言―』くろしお出版

表現上の不自然さをも広義の誤用と捉え，発想や文脈的意味にふさわしい文型を用いることが正用であるとする立場から，誤用例文について分析・解説し，提言を行っている。

吉川武時(1978)「誤用例による研究の意義と方法」『日本語教育』34 号　pp.15-20 日本語教育学会

学習者の誤用について考えるとき，母語別の傾向が強いとは必ずしも言えないことを指摘。誤用分析の際には文法的判断が必要であり，誤用を研究することで文法への洞察が深まる点，誤用研究が日本語教育に生かされるべきであるという点を提示している。

吉川武時(1982-83)　「誤用分析(1)－(6)」『日本語学』vol.1　11 月号 - vol.2 4 月号　明治書院

誤用の種類を提示。誤用の原因についても例を挙げながら分類している。また誤用の生じやすい分野を文法及び社会言語学的観点から整理。学習者の意図に沿った正し方と誤用をなくすため日本語教師がとるべき方法について提案している。

3.1.2　誤用分析の方法論

長友和彦・迫田久美子(1987)「誤用分析の基礎研究(1)」『教育学研究紀要』33 巻　pp.144-149 中国四国教育学会

学習者の作文の誤用分析を通して，日本語の文法体系と学習者によるその習得過程を明らかにするための研究を行った。ここでは誤用の判断基準と方法を示し，分析結果とその検討を提示している。【42】

長友和彦・迫田久美子(1988)「誤用分析の基礎研究(2)」『教育学研究紀要』34 巻　pp.147-158 中国四国教育学会

上記の研究について方法論的枠組を示し，特に文文法・談話文法という規範が誤用の判断と正用文の再構築に関わっている点について分析表を多数提示しながら詳しく述べている。【43】

長友和彦・迫田久美子(1989)「誤用分析の基礎研究(3)」『教育学研究紀要』35 巻　pp.173-183 中国四国教育学会

学習者の作文の誤用分析を通して日本語の文法体系と学習者によるその習得過程を明らかにするための研究を行い，その分析結果について，使用文型と分節数の違い・動詞「て」形・形容詞過去形・助詞「が」「は」という観点から習得状況に着目しつつ考察している。【44】

3.2　文法項目に関する習得研究

3.2.1　助詞に関する習得研究

市川保子 (1989) 「取り立て助詞「ハ」の誤用」『日本語教育 』67 号 pp. 159-172 日本語教育学会

日本語学習者の作文における「ハ」の誤用を収集し，分類。「ハ」の性質についての解説を加えながら誤用例を分析し，誤用傾向を明らかにしている。【5】

久保田美子(1994)「第二言語としての日本語の縦断的習得研究－格助詞「を」「に」「で」「へ」の習得過程について―」「日本語教育」82 号　pp.72-85　日本語教育学会

英語を母語とする日本語初級学習者を対象とし，格助詞「を」「に」「で」「へ」の習得過程を縦断的に調査し分析している。助詞によって文型の違いが習得に影響するものとそうでないものがある。また影響が見られる場合でも学習者および助詞によって複雑な習得過程を示す。【17】

坂本　正（1997）「助詞「は」と「が」の学習ストラテジー」『研究セミナー　日本語教育と言語学習ストラテジー資料集』pp.9-12　南山大学

鈴木忍（1978）「文法上の誤用例から何を学ぶか―格助詞を中心にして―」『日本語教育』34 号 pp.1-14　日本語教育学会

日本語学習者の作文から主に格助詞に関するものを中心に誤用を拾い，誤用とする理由，誤用の原因を分析。それに対する処置（助詞の用法を定義する，等）を具体的に述べている。【35】

長友和彦(1991)「談話における「が」「は」とその習得について―Systematic Variation Model―」『日本語シンポジウム：言語理論と日本語教育の相互活性化予稿集』pp.10-24 津田日本語教育センター

松田由美子・斎藤俊一(1992)「第二言語としての日本語学習に関する縦断的事例研究」『世界の日本語教育』第 2 号　pp.129-156　国際交流基金日本語国際センター

日本語学習者を対象に縦断的研究を行い，学習者が目標言語の構造を常に仮説設定すること，目標言語をモニターし対話者を利用することなどのストラテジーを検証。また格助詞使用状況調査から学習者の認知過程を考察し検証に妥当性を与えている。【54】

3.2.2　指示詞コソアに関する習得研究

遠藤めぐみ(1988)「日本語の指示詞コ・ソ・アの使い分けに関する言語心理学的研究」『東

京大学教育学部紀要』第 28 巻　pp.285-294　東京大学教育学部
迫田久美子（1992）「日本語学習者による指示詞「コ・ソ・ア」の習得に関する研究」『平成 3 年度広島大学大学院教育学研究科修士論文抄』pp.169-172　広島大学教育学研究科
迫田久美子（1993 a）「コミュニケーションにおける「あれ」の用法と機能」『日本語教育』80 号　pp.195-196　日本語教育学会
話し言葉に見られる「あれ」の用法を「仮置き型」と「代用型」に分類し，使用の際の機能的特徴を述べている。
迫田久美子（1993 b）「話しことばにおけるコ・ソ・アの中間言語研究」『日本語教育』81 号　pp.67-81 日本語教育学会
日本語学習者の話し言葉におけるコソアの使用状況を調査し，非現場指示のコソアの習得や学習困難点，および母語指示体系の影響等について仮説を検証する形で分析している。【29】
迫田久美子（1996 a）「日本語の指示詞ソとアの使い分けに関わる聞き手配慮について」細田和雅先生退官記念論文集刊行委員会（編）『日本語の教育と研究』pp.39-52　渓水社
迫田久美子（1996 b）「指示詞コ・ソ・アに関する中間言語の形成過程―対話調査による縦断的研究に基づいて―」『日本語教育』89 号　pp.64-75 日本語教育学会
日本語学習者が指示詞コソアを習得していく順序や誤用について縦断的に調査し，中間言語の形成過程という視点から分析している。【30】
迫田久美子（1997 a）「中国語話者における指示詞コ・ソ・アの言語転移」『広島大学日本語教育学科紀要』第 7 号　pp.63-72　広島大学教育学部日本語教育学科【31】
迫田久美子（1997 b）「日本語学習者における指示詞ソとアの使い分けに関する研究」『第二言語としての日本語の習得研究』pp.57-70　第二言語習得研究会
母語の異なる日本語学習者においても指示詞ソとアの使い分けが難しいことを示し，その使い分けが何に起因するかを，名詞と結合するソ系指示詞・ア系指示詞に関して明らかにしている。3 年間の対話調査による縦断的研究の結果を，穴埋めテストの横断調査により検証。「ソ系+抽象名詞」「ア系+具体名詞」のパターン形成という結果を得ている。
迫田久美子（1998）『中間言語研究―日本語学習者による指示詞コ・ソ・アの習得―』渓水社
申　恵環（1985 b）「第二言語としての日本語習得における『コ・ソ・ア』の問題」『言語の世界』2 巻　2 号　pp.97-111
韓国語を母語とする日本語学習者について指示詞「コソア」の習得状況を調査。誤答率と来日時年齢，滞日期間の関係から，10 歳未満での来日や 5 年以上の滞日が習得度を高めており，10 歳未満で来日した人はその後の滞日による上達度が高い等の傾向を報告している。【34】
宋　晩翼(1989 a)「指示詞「コ・ソ・ア」の用法について―プロトタイプ論的な見方からの試案―」『広島大学大学院教育学研究科博士課程論文集』15 巻　pp.133-139 広島大学教育学部

「コソア」の用法について現場指示用法と文脈指示用法をそれぞれ3つの下位分類に従って分析，解説。各概念規定には原点から派生への連続した系統が存在し第一言語の習得順序に重なるという提言を示している。

宋　晩翼(1989 b)「日•韓指示語の対照研究(一)」『教育学研究紀要』35巻　pp.142-147 中国四国教育学会

宋　晩翼(1990)「日•韓指示語の対照研究(二)―「コ・ソ・ア」と「i・ku・cho」の非現場指示及び「語形」について―」『広島大学大学院教育学研究科博士課程論文集』16 巻 pp.116-122　広島大学教育学部

「コソア」とそれに対応する韓国語を比較。非現場指示用法をさらに3つの状況に分け，両言語の例文を挙げて違いを分析しながら解説している。また語形別の対応についても重なりあう点と相違点を表を用いて詳述している。

宋　晩翼(1991)「日本語教育のための日韓指示詞の対照研究」『日本語教育』75 号 pp.136-152 日本語教育学会

日本語における「コソア」の用法を日本語教育のために様々な「場」の状況別に分類し，韓国語との比較を行っている。その上で韓国語話者に対する「コソア」教育について具体的な提案を示している。

新村朋美(1992)「指示詞の習得―日英語の指示詞の習得の対照研究」『早稲田大学日本語研究教育センター紀要』第4巻 pp.36-59　早稲田大学日本語研究教育センター

日本語と英語の指示詞の違い（ずれ）を解明した上で両言語の指示詞の習得に関する仮説を検証。英語母語話者との共同研究であり，日本語母語話者は英語学習者の視点からも分析結果を見ることができる。

3.2.3　「て形・テイル」に関する習得研究

黒野敦子（1995）「初級日本語における「－テイル」の習慣について」『日本語教育』87 号 pp.153-164 日本語教育学会

「－テイル」の用法である「動作の継続」と「結果の状態」について，初級日本語学習者の習得状況を調査し，分析。習得の難易と習得過程について明らかにしている。【18】

坂本　正（1993）「英語話者における「て形」形成規則の習得について」『日本語教育』80 号　pp.125-135 日本語教育学会

英語母語話者である日本語学習者の「て形」形成規則の習得状況を調査・分析し，誤用率にあらわれた三層の難易度等を明らかにしている。【27】

長友和彦(1997)「動詞テ形に関わる音韻規則の習得と言語の普遍性」『第二言語としての日本語の習得研究』1号　pp.1-8　第二言語習得研究会

動詞テ形に関わる音韻規則の習得順序を決定するのはその規則の有標性であるという仮説を検証。労力の節減が大きい規則（音声学的部分同化規則＝無標）の方が（完全同化規則＝有標）より定着しやすいこと，および CV(子音-母音)という音節の形成や「聞こえ度階層」の原理から母音添加規則（無標）が子音脱落規則（有標）に優先

して習得されることを示し，説明的妥当性を与えている。

吉田妙子（1994）「台湾学習者における「て」形接続の誤用分析―「原因・理由」の用法の誤用を焦点として―」『日本語教育』84 号　pp.92－103　日本語教育学会

日本語学習者の動詞「て」形の肯定形に関する誤用を調査，分類。原因・理由としての「て」形について例を挙げながら分析している。【59】

3.2.4　モダリティや文末表現に関する習得研究

大島弥生(1993)「中国語・韓国語話者における日本語のモダリティ習得に関する研究」『日本語教育』81 号　pp.93-103 日本語教育学会

日本語学習者のアンケート調査における「だろう」「かもしれない」「ようだ」「みたいだ」「らしい」というモダリティ表現を日本語母語話者と比較し，習得状況を母語別・学習段階別に分析している。長友（1991）の提唱した SVM（Systematic Variation Model）の立場に立つ。【10】

菊池民子・猪狩美保・嶽肩志江(1997)「日本語モダリティ表現の予測能力とその習得に関する研究」『第二言語としての日本語の習得研究』vol.1　pp.71-99 第二言語習得研究会

文理解の際，次に続く言語情報を予測する能力について解明するため，文末モダリティ表現の予測の仕方とその要因を調査。日本語母語話者と学習者について得られた結果を比較し，分析している。

小金丸春美 (1990a)「「のだ」の誤用例分析」井上和子編『日本語の普遍性と個別性に関する理論的及び実証的研究報告（6Ｂ）』平成元年度科学研究費助成金特別推進研究 (1) pp.419-430

小金丸春美（1990b）「作文における「のだ」の誤用例分析」『日本語教育』71 号 pp.182-196 日本語教育学会

日本語学習者の作文における「のだ」の誤用について，「形の誤り」「非用」「不適切な使用」に分類・分析し，誤用を防ぐための方策を提示している。【22】

佐々木泰子・川口良（1994）「日本人小学生・中学生・高校生・大学生と日本語学習者の作文における文末表現の発達過程に関する一考察」『日本語教育』84 号　pp.1-13 日本語教育学会

日本語母語話者と中上級日本語学習者の作文の文末についてモダリティの観点から分析。日本語学習者では命題と説明のモダリティで文を終止することが多く，日本語母語話者では学齢が上がるにしたがって真偽判断のモダリティなど婉曲な表現を用い，豊かな表現の様相を呈するようになる，との結論を得ている。【32】

坪根由香里(1997)「「ものだ」「ことだ」「のだ」の理解難度調査」『第二言語としての日本語の習得研究』1 号　pp.137-156 第二言語習得研究会

「ものだ」「ことだ」「のだ」の用法を分類し，中上級の日本語学習者の理解度を調査。正答数と確信度の数値から各項目の難易度を明らかにし，分析している。

峯　布由紀(1995)「日本語学習者の会話における文末表現の習得過程に関する研究」『日本

語教育』86 号　pp.65-80 日本語教育学会

学習者の文末表現の習得過程を明らかにするため，縦断的かつ横断的対話資料をもとに文末表現の推移を数値により分析。レベルに応じた習得段階が認められ，学習者個人の会話スタイルや学習環境が反映されるといった点を示している。【55】

葉　照子(1990)「初級日本語学習者における「ノダ」使用例からみた誤用の類型について」『九州大学留学生教育センター紀要』第 2 号 pp.171-183 九州大学留学生教育センター

初級日本語教科書の「ノダ」の導入段階と解説，導入文を提示。さらに各教科書を使用した学習者の作文における「ノダ」使用例を挙げ，学習者の意図の確認や誤用認定も含めて分析。教科書指導と習得結果との関連や誤用傾向を検討し，指導への提言を行っている。【57】

3.2.5　文構造・複文・接続表現に関する習得研究

市川保子(1988)「クイズ・テストの結果と「習得状況の流れ」」『日本語教育』64 号 pp.164-175 日本語教育学会

日本語研修コースの留学生のクイズ・テストの結果を S-P 表(student-problem score table）を用いて分析。習得状況の流れを追い，文法指導についての提言を行っている。【4】

市川保子(1993)「中級レベル学習者の誤用とその分析―複文構造習得過程を中心に―」『日本語教育』81 号　pp.55-66　日本語教育学会

複文構造について中級レベル学習者の誤用を調査。学習者による複文の習得状況を把握するとともに「全体的誤り」を分析し，誤用傾向から見て習得困難な項目は接続詞，主語・主題，文末・ムード，語彙・表現であるとの結論を提示している。【6】

田中真理(1997)「視点・ヴォイス・複文の習得要因」『日本語教育』92 号　pp.107-118 日本語教育学会

文生成テストを用いて来日直後の学生と日本に滞在する学生への調査を行い，視点・ヴォイス・複文を中心とした習得とその要因を分析，検討している。【40】

田丸淑子・吉岡薫・木村静子(1993)「学習者の発話に見られる文構造の長期的観察」『日本語教育』81 号　pp.43-54 日本語教育学会

学習者の中間言語が目的語（目標言語）である母語話者の日本語に近づいてゆく過程を追うため，発話における文構造を縦断的に観察し，発達段階が数量的に示されるかを検討している。文構造分析の手段としてアタランス（U)，T 単位，S 句，語数（W）の単位を使用。

坪根由香里・坂田睦深(1996)「初級日本語学習者の順接・添加の接続表現における誤用の分析―パイロットスタディとして―」第 16 回第二言語習得研究会発表資料

廣利正代（1993)「初級日本語学習者の表現力―接続表現・文構造の発達過程―」第一回第二言語習得研究会合同研究会発表資料

3.2.6　その他の文法項目に関する習得研究

稲葉みどり(1991)「日本語条件文の意味領域と中間言語構造」『日本語教育』75 号 pp.87-99 日本語教育学会

英語母語話者である日本語学習者の「と・ば・たら・なら」を用いた条件文を，前件と後件の文末形式の呼応制約（モダリティ制約）の観点から調査。習得状況を分析し，その特徴と困難点を明らかにしている。【8】

岡田久美(1997)「授受動詞の使用状況の分析―視点表現における問題点の考察―」平成 9 年度日本語教育学会春季大会予稿集 pp.81-86　日本語教育学会

日本語学習者による授受構文（あげる，もらう，くれる）の使用状況を調査。非用や視点人物の省略も見た上で，習得順序の仮説を立てて教育への応用を示している。

鎌田　修(1992)「日本語の中間談話文法の一側面」『日本語・日本文化研究』創刊号　pp.14-28 京都外国語大学留学生別科

中間言語研究の背景と必要性を述べ，縦断的研究と横断的研究の長所・短所を紹介。実証的見地から日本語の伝達表現の習得について調査・分析を行った。日本語における終助詞「ね」の位置づけと他言語との比較，「間接話法化」のための自己文法修正，学習環境の違いによる伝達簡略化のあらわれ方の差について具体的に報告されている。【13】

家村伸子(1993)「日本語否定疑問文の応答に関する中間言語研究」『日本語教育』81 号 pp.81-92 日本語教育学会

日本語否定疑問文の応答について，疑問文の内容に同意・不同意の際それぞれはい・いいえを用いる場合を無標の応答と名づけた上で，日本語学習者がそれをどの程度習得しているかを学習レベル別，母語応答体系別に調査し，分析している。【15】

小林典子 (1987) 「外国人日本語学習者による副用語の誤用-誤用例の分類の試み」『日本語教育論集』第 3 号 pp.29-47 筑波大学留学生教育センター

副詞の他に，副詞的用法のイ形容詞，ナ形容詞，名詞+助詞，数量詞を「副用語」とし，留学生の作文における「副用語」の誤用を収集し，分類。誤用認定の方法も示しながら分析している。【23】

田丸淑子・吉岡薫(1994)「日本語発話資料分析の単位をめぐる問題―第二言語習得過程観察の立場から―」The Language Programs of The International University of Japan. Working Papers. Vol.5 国際大学

日本語学習者の発話と作文の，文構造を分析する際に用いる単位（文，およびその下部単位としての語，等）について，先行研究における単位使用を調査・検討。筆者による単位を提示し，設定の過程で明らかとなった問題点を詳述。第二言語習得過程の研究の際，単位設定が課題であることを示している。【41】

3.3　特定の母語話者に関する習得研究

青木晴夫(1980)「英語を母語とする日本語学習者の問題点」『日本語教育』40 号　pp.9-20 日本語教育学会

母語別に日本語教材を作成する際の留意点を検討。英語母語話者の音声・文字・文

法・語彙・運用といった面から見た問題点を，実例を挙げながら考察している。

安　龍沫(1996)「韓国人学習者の指示詞「コ・ソ・ア」の習得における母語の影響について―非現場指示の場合―」『東北大学文学部日本語学科論集』第 6 号　pp.1-13 東北大学文学部日本語学科

韓国人日本語学習者の指示詞の習得について調査。非現場指示をさらに分類し分析した。初級では母語依存型の選択基準が見られ，中級では正用率が一時低下。上級に進むと選択基準が揺れる傾向がある。またソ・アは習得が困難で母語の干渉も強く受ける，という結果を得ている。【1】

石田敏子(1991)「フランス語話者の日本語習得過程」『日本語教育』75 号　pp.64-77 日本語教育学会

フランス語母語話者の誤用の分析を通して中間言語に特徴的な現象を挙げ，日本語習得過程についての考察を行っている。【3】

市川保子（1990）「中国系留学生の誤用とその対策―「は」と「が」を中心に―」井上和子(編)『日本語の普遍性と個別性に関する理論的および実証的研究報告(6B)』平成元年度科学研究費補助金特別推進研究(1)　pp.395-408

猪崎保子(1995)「中国人日本語学習者にみられる助詞の習得について」『東京外国語大学留学生日本語教育センター論集』21　pp.15-27　東京外国語大学留学生日本語教育センター

中国の日本語学習者の作文に見られる誤用のうち，助詞「ハ」「ガ」「ヲ」「ニ」について分析し，誤用と使用文型，特にヴォイス，自他動詞との関係を観察している。

江原有輝子（1995）「メキシコ人学習者の構文の習得」『言語文化と日本語教育』9 号 pp.257-268 お茶の水女子大学日本言語文化研究会

メキシコの日本語学習者の作文における文構造の発達と接続語の使用との関係を分析。1 文中の文節や節の数の増加，接続詞から接続助詞への使用状況の変化等が報告されている。

王　怡(1995)「中国語話者に見られる『与える』,『やる／くれる』の誤用とその分析」『ことばの科学』8　pp.13-31　名古屋大学言語文化部

中国語を母語とする日本語学習者の誤用や問題点を分析。中国語の授受動詞の意味・用法と比較し違いを示した上で，誤用傾向を明らかにしている。

上條　厚(1989)「ベトナム語話者（難民）の誤用分析」『日本語教育』68 号　pp.248-258 日本語教育学会

ベトナム語母語話者である日本語学習者の誤用について，ベトナム語の語法と対照させながら分析している。【14】

顧海根・徐昌華（1980）「中国人学習者によく見られる誤用例―疑問詞用法と受身文を中心に―」『日本語教育』41 号 pp.47-60 日本語教育学会

中国語母語話者である日本語学習者に特徴的な誤用，疑問詞用法と受身文を例示し，中国語の表現法と比較・対照しながら分析している。中国語母語話者に対する教授と学習への寄与を目指すものである。【19】

顧海根 (1981) 「中国人学習者によく見られる誤用例（二）―動詞，形容詞，代名詞などを中心に―」『日本語教育』44 号 pp.57-69 日本語教育学会

中国語を母語とする日本語学習者に特徴的な誤用を挙げ，中国語との違いを解説しながら原因を分析。こうした差異を明示し各項目への注意を促すことが中国語母語話者への効果的な指導につながるという論旨が示されている。【20】

顧海根 (1983)「中国人学習者によく見られる誤用例―格助詞，係助詞「も」，接続助詞「て」などを中心に―」『日本語教育』49 号 pp.105-118 日本語教育学会

中国語を母語とする日本語学習者の誤用について，助詞を中心に日本語と中国語の相違を浮き彫りにしながら分析している。【21】

小林ミナ・カッケンブッシュ寛子・深田淳（1991）「外来語に見られる日本語化規則の習得―英語話者の調査に基づいて―」『日本語教育』74 号　pp.48-59 日本語教育学会

英語を母語とする初級日本語学習者について，外来語にみられる日本語化規則の習得状況を調査，分析している。促音挿入，長母音化という問題点を指摘し，習得が中間言語の規則に基づくという示唆へとつなげている。【26】

小林幸江 (1981) 「モンゴル人に対する日本語教育の研究―モンゴル人学生の誤用例を中心に―」『日本語学校論集』第 8 号 pp.25-38 東京外国語大学

モンゴル語を母語とする初級日本語学習者の作文に見られる誤用例を紹介し，文法が似ていると言われる日本語とモンゴル語の相違点を示している。その上で特にモンゴル語の与位格にあたる日本語の助詞（に，で）の誤用について両言語を比較しながら詳しく分析している。【24】

小林幸江 (1983) 「モンゴル人学習者の作文にあらわれた誤用例の分析―格助詞に関する誤用について―」『日本語学校論集』第 10 号 pp.44-53 東京外国語大学

モンゴル語母語話者である日本語学習者の格助詞に関する誤用について，数の多いものに注目し，モンゴル語と日本語を比較し表現形式や意味範囲のズレを検討するなど詳しい分析を行っている。【25】

桜井明治(1986)「中国人日本語表現誤用の分析―中国人学生の日本語作文を素材として―」『長崎県立国際経済大学論集』20(2),1986.12,pp.31-63 長崎県立国際経済大学学術研究会

中国の大学の日本語学習者の作文に現れた誤用から，中国母語話者の中級日本語学習者がおかす誤用の特徴を項目別に分類し特徴を明らかにしたもの。各誤用例に対し正用を示している。【28】

佐藤正子（1984）「アメリカ人の日本語誤用例の問題点―初級段階の場合―」『講座日本語教育』第 19 号　pp.1-22　早稲田大学語学教育研究所

英語を母語とする日本語学習者の誤用について，14 項目に分類。日英両言語の違い（発音，語義の範囲，前置詞，助詞等）から来る誤用の原因を分析し，指導法への提言を行っている。【33】

全　賢善(1994)「終助詞「ね」，「よ」の使い分けの原理―韓国語話者の誤用および非用から―」『平成 6 年度日本語教育学会秋季大会予稿集』pp.141-144 日本語教育学会

韓国語母語話者に見られる終助詞「ね」「よ」の誤用と非用の調査からその原因を考

察し，指導のための具体案を示している。

田中真理(1991)「インドネシア語を母語とする学習者の作文に現れる「受身」についての考察」『日本語教育』74 号　pp.109-122 日本語教育学会

インドネシア語では対象を主格にした文が頻繁に使われ pasif と称されるため，それがすなわち日本語の受身と受け取られ誤用を生んでいる。それぞれの違いと成立条件について分析し，受身導入時にインドネシア語と日本語の文構造の違いの提示も必要と説いている。【39】

野沢素子 (1985) 「中国語話者の作文における誤用例より (I)」『日本語と日本語教育』13 号 pp.15-33 慶応大学語学センター

中国語母語話者の日本語学習における接続助詞の誤用を中心に調査し，日本語と中国語の接続の仕方の異同を概観。日本語の各接続詞に対応する中国語が無標のもの，無標と有標が重なるもの，有標のものに分け，日中両言語の例文を挙げている。【48】

野沢素子 (1986) 「中国語話者の作文における誤用例より (Ⅱ)」『日本語と日本語教育』14 号 pp.17-31 慶応大学語学センター

日本語の文末表現「～なる」について中国語母語話者の日本語作文に見られる誤用を調査。困難点を明らかにするため中国語との対応を示した。母語と目標言語が一対一対応である場合が最も学習しやすく，そのバランスが崩れるほど難しい項目である点を実証している。【49】

菱沼　透(1980)「中国語と日本語の言語干渉―中国人学習者の語用例―」『日本語教育』42 号　pp.58-72 日本語教育学会

中国語を母語とする日本語学習者の誤用について，干渉に基づくと思われる例を挙げ，文法・文化レベル（漢字を媒介としない誤用），語彙レベル，正書法レベルに分けて分析している。【50】

馮　富栄（1994）「日本語使役文の学習過程における母語（中国語）の影響について」『教育心理学研究』42－3　pp.81-90　日本教育心理学会

細川秀雄(1990)「フランス人の日本語作文における誤用とその種類」『金沢大学教養部論集人文科学編』27(2)　pp.119-160　金沢大学教養部

フランス語を母語とする日本語学習者の作文の誤用を項目別に分類している。資料となる 558 文に現れた誤用のすべてについて寺村秀夫(1982)『日本語のシンタクスと意味』(くろしお出版)の分類に項目を追加し，帰納的に求められた分類となっている。巻末に資料全文を掲載。【52】

渡邊亜子(1995)「中国語母語話者の日本語受身文の使用実態とその背景―母語との対照からの仮説設定―」『言語文化と日本語教育』9 号 pp.218-228　お茶の水女子大学日本言語文化学研究会

中国語母語話者が使用する日本語受身文の使用実態を分析。談話レベルでの実態を調査し，母語の影響と思われるものについては中国語との比較を行っている。

3.4　社会言語学・語用論に関する習得研究

生駒知子・志村明彦(1993)「英語から日本語へのプラグマティック・トランスファー：「断り」という発話行為について」『日本語教育』75 号　pp.41-52 日本語教育学会

「断り」という発話行為をアメリカ人日本語学習者が日本語でどのように表現するかを調査し，それを英語母語話者・日本語母語話者の発話と比較することにより，英語から日本語へのプラグマティック・トランスファー（語用論レベルの転移）について分析している。【2】

奥田邦男(1977)「日本語における Speech　Formulas の研究(1)」『教育学研究紀要』第 23 巻　pp.183-185　中国四国教育学会

奥田邦男(1979)「日本語における Speech　Formulas の研究(2)」『教育学研究紀要』第 25 巻　pp.226-228　中国四国教育学会

尾崎明人(1981)「外国人の日本語の実態(2)　上級日本語学習者の伝達能力について」『日本語教育』45 号　pp.41-52 日本語教育学会

誤用分析を文法能力ではなく伝達能力の観点から行い，これをネウストプニーの命名にならって問題分析と位置づける。伝達内容がうまく伝わらないとき用いる手段(不確かさの表明，確認，簡略化等)，コミュニケーションを円滑にするための手段（声量，間投詞等）についてまとめ，フォローアップインタビューで発話者の意図も確認し，分析。教育上の提言を行っている。【11】

尾崎明人(1992)「「聞き返し」のストラテジーと日本語教育」『日本語研究と日本語教育』pp.251-263 名古屋大学出版会

日本語学習者が使用している「聞き返し」のストラテジーについて調査。初級では名詞型の普通形と動詞型の使用，上級では母語話者に近い傾向が見られ，初級でも個人差（「聞き返し」タイプと「聞き流し」タイプ）がある。1 対 1 の会話の表現や丁寧さを教えることなどの提言を行っている。

尾崎明人（1993）「接触場面の訂正ストラテジー―「聞き返し」の発話交換をめぐって―」『日本語教育』81 号　pp.19-30 日本語教育学会

コミュニケーション・ストラテジーの一つである「聞き返し」について日本語学習者が用いた際の特徴と，それが母語話者のどのような応答を引き出しているかを調査し，結果を分析している。【12】

スクータリデス・A.(1981) 「外国人の日本語の実態 (3):日本語におけるフォリナー・トーク」『日本語教育』45 号 pp.53-62 日本語教育学会

フォリナー・トークを話し手によって簡略化された言語目録の一つと捉え，これまでの研究に見られる社会言語学的アプローチに偏らない広い視点からの考察を行っている。

西村史子(1998)「中級学習者が書く詫びの手紙における誤用分析―文の適切性の観点から―」『日本語教育』99 号　pp.72-83　日本語教育学会

中級日本語学習者に対し目上の人に宛てた詫びの手紙という日本語の課題を与え，その中の不適切な表現としての誤用を分析している。日本語母語話者の手紙や英語話者による英語の手紙と比較し，母語からの影響や社会言語学的認識の不足から誤用が

生じるという結論へ導いている。【47】
藤森弘子（1995）「日本語学習者に見られる「弁明」意味公式の形式と使用―中国人•韓国人学習者の場合―」『日本語教育』87 号　pp.79-90　日本語教育学会
日本語学習者の「断り」の発話のうち「弁明」発話に見られる節末・文末形式の使用状況を日本語母語話者と比較。親疎・社会的関係の違う場面と節末・文末の形式によって分類，分析している。【51】
堀口純子(1979)「作文における誤用例の場面による分類」『日本語教育』37 号　pp.103-116 日本語教育学会
日本語学習者の題材別作文（「自己紹介」「冬休み」「私の家へ行く道」）に見られる誤用を場面による下位分類に沿って正用とともに提示。家族の紹介や時間表現などの典型例は教材作成や作文指導にも有用とし示唆を述べている。【53】
町田延代(1997)「電話におけるフォリナー•トーク•ディスコースの違い―日本語非母語話者の言語能力と交渉―」『第二言語としての日本語の習得研究』1 号　pp.83-100 第二言語習得研究会
非母語話者と母語話者の日本語の会話（フォリナー・トーク・ディスコース）を観察。非母語話者の「交渉」（相手の発話の意味を理解しようとする働きかけ）を調査し，言語能力が低い学習者ほど「交渉」を行い母語話者の「調整」（フォリナー・トーク）を引き出すという結論を得ている。
水田澄子(1995)「日本語母語話者と日本語学習者(中国人)に見られる独話聞き取りのストラテジー」『日本語教育』87 号　pp.66-78 日本語教育学会
日本語母語話者と学習者の独話聞き取りのストラテジーを調査。結果分析によりストラテジーの連鎖，日本語母語話者と学習者の使用するストラテジーの違い，「推測」のストラテジーが効果的であることなどを示し，聞き取り能力育成を理論的に支える実証研究として提示されている。
水谷　修 (1987)「外国人の日本語談話行動における誤用の研究」『日本語の特性と機械翻訳』 PP.72-82 第 1 回「大学と科学」公開シンポジウム組織委員会
水谷信子(1985)『日英比較　話しことばの文法』くろしお出版
御舘久里恵(1997)「日本語母語話者の接触場面におけるフォリナー•トークの諸相―非言語行動を含めた談話過程の観察から―」『日本語教育学会秋季大会予稿集』pp.185-190 日本語教育学会
村岡英裕 (1992) 「実際使用場面での学習者のインターアクション能力について：「ビジターセッション」場面の分析」『世界の日本語教育』第 2 号 pp.115-127 国際交流基金日本語国際センター
教室に日本語母語話者を招いて会話学習をした際，学習者との間で交わされた会話を分析。インターアクション能力育成のため，実際使用場面の導入が有効であることを確認し，使用されたコミュニケーションストラテジーを報告。会話のマネージメントに関する教育の必要性も併せて示唆している。
村上かおり(1997)「日本語母語話者の『意味交渉』にタスクの種類が及ぼす影響―母語話

者と非母語話者とのインターアクションにおいて―』『第二言語としての日本語の習得研究』1号　pp.119-136　第二言語習得研究会
山田伸子(1992)「買い物場面のインターアクション―店員の販売行動を中心に―」『日本語教育』77号　pp.116-128 日本語教育学会
買い物場面について，店員・客ともに日本人の場合と，店員がオーストラリア人・客が日本人の場合について分析し，接触場面に見られる問題点を明らかにしている。文法等の「言語能力」，敬語等の「社会言語能力」，日本人客への対応などの「社会文化能力」に着目し，それらの育成について教育上の提言を行っている。【56】
横田淳子(1986)「ほめられた時の返答における母国語からの社会言語学的転移」『日本語教育』58号　pp.203-223 日本語教育学会
アメリカ人日本語学習者が日本語でほめられたとき，どのような返答をするかについて仮説を立てた上で調査。返答の仕方の特徴と母語からの社会言語学的転移の関係を明らかにしている。【58】
横山杉子(1993)「日本語における「日本人の日本人に対する断り」と「日本人のアメリカ人に対する断り」の比較」『日本語教育』81号　pp.141-151 日本語教育学会
日本語母語話者のアメリカ人日本語学習者に対する断りの発話行為と，日本語母語話者同士の断りを調査・比較し，社会言語学的レベルでもフォリナートークという形での修正が行われているかについて分析している。
渡邊亜子(1992)「日本語学習者の談話における視点―ストーリーテリングによる調査の分析―」『日本語教育学会創立30周年・法人設立15周年記念大会予稿集』pp.73-78
日本語学習者が4コマ漫画に沿ってストーリーを語る際の視点に着目し，日本語と母語による表現を類型化した上で分析している。
渡辺恵美子(1994)「日本語学習者のあいづちの分析―電話での会話において使用された言語的あいづち―」『日本語教育』82号　pp.110-122 日本語教育学会
日本語学習者のあいづちの使用実態を日本語母語話者のあいづちと比較し，分析している。学習者のあいづちの特徴や誤用傾向を明らかにするとともに，「非用」の問題にも言及している。【62】

3.5　音声に関する習得研究

鮎沢孝子 (1993) 「外国人学習者による日本語の質問文イントネーションの習得過程」水谷・鮎沢・前川編『日本語音声と日本語教育』平成4年度重点領域研究D1班研究成果報告書 PP.161-186
日本語学習者の発話における東京語質問文の文末上昇イントネーションの韻律を分析し，習得状況を7段階に分類。母語の韻律のまま日本語を発話している状況から，語のアクセント型に対応した文末上昇パターンの習得へと進む段階を示し，質問文イントネーション習得のための韻律教育のシラバスを提示している。
今田滋子 (1990) 「発音の誤用分析の試み」『日本語と日本語教育 第3巻・日本語の音声・音韻（下）』 pp.47-71

日本語学習者の中間言語を音声面からとらえ，リズム(拍)や個々の発音（有声音と無声音，撥音，促音など）に関して分析。誤用について，音声素性に関わる誤用の項目が多いほど聞いて分かりにくい，すなわちコミュニケーションに与える困難度が高い発音であるとしている。

吉光邦子 (1981)「外国人の日本語の実態 (4):外国人学習者のアクセント」『日本語教育』45号 pp.63-74 日本語教育学会

中級および上級日本語学習者の会話場面でのアクセントを調査・分析し，誤りのパターンを示して，教育上の提言を行っている。【60】

刘(ﾘｭｳ)淑媛 (1984)「中国人学習者によく見られる発音上の誤りとその矯正方法」『日本語教育』53 号 pp.93-101 日本語教育学会

中国語母語話者が日本語を学習する際，誤りやすく留意すべき発音について，中国語と日本語の発音を比較しながら分析，解説している。【61】

3.6 第二言語習得理論の実証研究

榎本安吾(1996)「日本語習得を促進するタスクとはどのようなものか？―インターアクション仮説の立場より」『日本語教育学会秋季大会予稿集』pp.250-255 日本語教育学会

Long のインターアクション仮説を踏まえ，コミュニケーション・タスクを「情報の流れ（双方向か一方向か）」「ゴールの設定（特定のゴールを求めるか）」「描写型・意見表出型」の視点で比較し，日本語習得を促進するタスクについて考察している。

土井利幸・佐々木嘉則(1987 a)「外国語習得の自然な順序に基づいた外国語指導を目指して―P・J モデルの紹介―1」『英語教育』 6 月号　pp.43-45　大修館

外国語習得の自然な順序に基づいた外国語指導は，学習者が無理なく学べる効果の高い語学教育と言える。そうした指導を目指すためには外国語習得における普遍的な法則を見出すことが必要であるとし，英語教育における現状等を例に挙げながら論じている。ピーネマン・ジョンストンモデル紹介のための序章。

土井利幸・佐々木嘉則(1987 b)「外国語習得の自然な順序に基づいた外国語指導を目指して―P・J モデルの紹介―2」『英語教育』 7 月号　pp.33-35　大修館

ピーネマン・ジョンストンモデルは学習者が文を産出する際に頭の中で行う操作の複雑さの程度に注目し，文法構造の習得のメカニズムを説明している。その内容を詳述し，P-J モデルを紹介している。

土井利幸・佐々木嘉則(1987 c)「外国語習得の自然な順序に基づいた外国語指導を目指して―P・J モデルの紹介―3」『英語教育』 8 月号　pp.29-31　大修館

P-J モデルの示す文法項目の習得順序を外国語教育に生かすことを提案し，英語・ドイツ語における具体例や，相対する理論 Natural Approach との比較を示した上で，今後の展望と課題を述べている。

土井利幸・吉岡薫(1990)「助詞の習得における言語運用上の制約―ピーネマン・ジョンストンモデルの日本語習得研究への応用―」『平成 3 年度日本語教育学会秋季大会予稿集』

pp.27-33 日本語教育学会

第二言語習得モデルの一つであるピーネマン・ジョンストンモデルを日本語習得研究に応用。助詞の習得に言語運用上の制約がかかわっているという仮説を検証する実験を行い，仮説支持となった結果を提示している。

4 参考文献一覧（五十音順）

各項目末尾の〈 〉内の数字は第3章における分類を示す。分類項目については第3章の冒頭参照。

青木晴夫(1980)「英語を母語とする日本語学習者の問題点」『日本語教育』40 号 pp.9-20 日本語教育学会 〈3.3〉

鮎沢孝子 (1993) 「外国人学習者による日本語の質問文イントネーションの習得過程」水谷・鮎沢・前川編『日本語音声と日本語教育』平成4年度重点領域研究D1班研究成果報告書 pp.161-186 〈3.5〉

安 龍沫(1996)「韓国人学習者の指示詞「コ・ソ・ア」の習得における母語の影響について―非現場指示の場合―」『東北大学文学部日本語学科論集』第 6 号 pp.1-13 東北大学文学部日本語学科 〈3.3〉

生駒知子・志村明彦(1993)「英語から日本語へのプラグマティック・トランスファー：「断り」という発話行為について」『日本語教育』75 号 pp.41-52 日本語教育学会 〈3.4〉

石田敏子(1991)「フランス語話者の日本語習得過程」『日本語教育』75 号 pp.64-77 日本語教育学会 〈3.3〉

市川保子(1988)「クイズ・テストの結果と「習得状況の流れ」」『日本語教育』64 号 pp.164-175 日本語教育学会 〈3.2.5〉

市川保子 (1989) 「取り立て助詞「ハ」の誤用」『日本語教育 』67 号 pp. 159－172 日本語教育学会 〈3.2.1〉

市川保子（1990）「中国系留学生の誤用とその対策―「は」と「が」を中心に―」井上和子(編)『日本語の普遍性と個別性に関する理論的および実証的研究報告(6B)』平成元年度科学研究費補助金特別推進研究(1) pp.395-408 〈3.3〉

市川保子(1993)「中級レベル学習者の誤用とその分析―複文構造習得過程を中心に―」『日本語教育』81 号 pp.55-66 日本語教育学会 〈3.2.5〉

稲垣滋子(1976)「外国人学生の「書く」ことによる表現力―作文の中の誤用例から―」『Annual Reports 1』国際基督教大学 〈3.1.1〉

稲垣滋子(1985)「誤用分析(1)－(6)」『日本語学』vol.4 1月号-6月号 明治書院 〈3.1.1〉

稲葉みどり(1991)「日本語条件文の意味領域と中間言語構造」『日本語教育』75 号 pp.87-99 日本語教育学会 〈3.2.6〉

猪崎保子(1995)「中国人日本語学習者にみられる助詞の習得について」『東京外国語大学留

学生日本語教育センター論集』21　pp.15-27　東京外国語大学留学生日本語教育センター　〈3.3〉
今田滋子 (1990) 「発音の誤用分析の試み」『日本語と日本語教育 3・日本語の音声・音韻（下）』 pp.47-71 明治書院　〈3.5〉
榎本安吾(1996)「日本語習得を促進するタスクとはどのようなものか？―インターアクション仮説の立場より」『日本語教育学会秋季大会予稿集』pp.250-255 日本語教育学会　〈3.6〉
江原有輝子（1995）「メキシコ人学習者の構文の習得」『言語文化と日本語教育』9 号 pp.257-268 お茶の水女子大学日本言語文化研究会　〈3.3〉
遠藤織枝(1978)「作文における誤用例―モスクワ大学での場合―」『日本語教育』34 号 pp.35-46　日本語教育学会　〈3.1.1〉
遠藤めぐみ(1988)「日本語の指示詞コ・ソ・アの使い分けに関する言語心理学的研究」『東京大学教育学部紀要』第 28 巻　pp.285-294　東京大学教育学部
〈3.2.2〉
王　怡(1995)「中国語話者に見られる「与える」,「やる／くれる」の誤用とその分析」『ことばの科学』8　pp.13-31　名古屋大学言語文化部　〈3.3〉
大島弥生(1993)「中国語・韓国語話者における日本語のモダリティ習得に関する研究」『日本語教育』81 号　pp.93-103 日本語教育学会　〈3.2.4〉
大曽美恵子(1986－87) 「誤用分析(1)－(6)」『日本語学』vol.5　9 月号 - vol.6　2 月号　明治書院　〈3.1.1〉
岡田久美(1997)「授受動詞の使用状況の分析―視点表現における問題点の考察―」平成 9 年度日本語教育学会春季大会予稿集　pp.81-86　日本語教育学会　〈3.2.6〉
奥田邦男(1977)「日本語における Speech　Formulas の研究(1)」『教育学研究紀要』第 23 巻　pp.183-185　中国四国教育学会　〈3.4〉
奥田邦男(1979)「日本語における Speech　Formulas の研究(2)」『教育学研究紀要』第 25 巻　pp.226-228　中国四国教育学会　〈3.4〉
尾崎明人(1981)「外国人の日本語の実態(2)　上級日本語学習者の伝達能力について」『日本語教育』45 号　pp.41-52 日本語教育学会　〈3.4〉
尾崎明人(1992)「「聞き返し」のストラテジーと日本語教育」『日本語研究と日本語教育』pp.251-263　名古屋大学出版会　〈3.4〉
尾崎明人（1993）「接触場面の訂正ストラテジー―「聞き返し」の発話交換をめぐって―」『日本語教育』81 号　pp.19-30 日本語教育学会　〈3.4〉
鎌田　修(1992)「日本語の中間談話文法の一側面」『日本語・日本文化研究』創刊号　pp.14-28 京都外国語大学留学生別科　〈3.2.6〉
上條　厚(1989)「ベトナム語話者（難民）の誤用分析」『日本語教育』68 号　pp.248-258 日本語教育学会　〈3.3〉
家村伸子(1993)「日本語否定疑問文の応答に関する中間言語研究」『日本語教育』81 号 pp.81-92 日本語教育学会　〈3.2.6〉

茅野直子・仁科喜久子(1978)「学生の誤用例分析と教授法への応用」『日本語教育』34 号 pp.57-66　日本語教育学会　〈3.1.1〉
菊池民子・猪狩美保・嶽肩志江(1997)「日本語モダリティ表現の予測能力とその習得に関する研究」『第二言語としての日本語の習得研究』vol.1　pp.71-99 第二言語習得研究会　〈3.2.4〉
久保田美子(1994)「第二言語としての日本語の縦断的習得研究－格助詞「を」「に」「で」「へ」の習得過程について―」「日本語教育」82 号　pp.72-85　日本語教育学会　〈3.2.1〉
黒野敦子（1995）「初級日本語における「－テイル」の習得について」『日本語教育』87 号 pp.153-164 日本語教育学会　〈3.2.3〉
顧海根・徐昌華（1980）「中国人学習者によくみられる誤用例―疑問詞用法と受身文を中心に―」『日本語教育』41 号　pp.47-60 日本語教育学会　〈3.3〉
顧海根 (1981) 「中国人学習者によく見られる誤用例（二）―動詞，形容詞，代名詞などを中心に―」『日本語教育』44 号 pp.57-69 日本語教育学会　〈3.3〉
顧海根 (1983)「中国人学習者によく見られる誤用例―格助詞，係助詞「も」，接続助詞「て」などを中心に―」『日本語教育』49 号 pp.105-118 日本語教育学会　〈3.3〉
小金丸春美 (1990a)「「のだ」の誤用例分析」井上和子編『日本語の普遍性と個別性に関する理論的及び実証的研究報告（6Ｂ）』平成元年度科学研究費助成金特別推進研究 (1) pp.419-430　〈3.2.4〉
小金丸春美 (1990b)「作文における「のだ」の誤用例分析」『日本語教育』71 号 pp.182-196 日本語教育学会　〈3.2.4〉
小林典子 (1987) 「外国人日本語学習者による副用語の誤用―誤用例の分類の試み―」『日本語教育論集』第 3 号 pp.29-47 筑波大学留学生教育センター
〈3.2.6〉
小林ミナ・カッケンブッシュ寛子・深田淳（1991）「外来語にみられる日本語化規則の習得―英語話者の調査に基づいて―」『日本語教育』74 号　pp.48-59 日本語教育学会
〈3.3〉
小林幸江 (1981) 「モンゴル人に対する日本語教育の研究―モンゴル人学生の誤用例を中心に―」『日本語学校論集』第 8 号 pp.25-38 東京外国語大学　〈3.3〉
小林幸江 (1983) 「モンゴル人学習者の作文にあらわれた誤用例の分析―格助詞に関する誤用について―」『日本語学校論集』第 10 号 pp.44-53 東京外国語大学　〈3.3〉
坂本　正（1993）「英語話者における「て形」形成規則の習得について」『日本語教育』80 号　pp.125-135 日本語教育学会　〈3.2.3〉
坂本　正（1997）「助詞「は」と「が」の学習ストラテジー」『研究セミナー　日本語教育と言語学習ストラテジー資料集』pp.9-12　南山大学　〈3.2.1〉
桜井明治(1986)「中国人日本語表現誤用の分析―中国人学生の日本語作文を素材として―」『長崎県立国際経済大学論集』20(2),1986.12,pp.31-63 長崎県立国際経済大学学術研究会
〈3.3〉
迫田久美子（1992）「日本語学習者による指示詞「コ・ソ・ア」の習得に関する研究」『平

成 3 年度広島大学大学院教育学研究科修士論文抄』pp.169-172　広島大学教育学研究科〈3.2.2〉
迫田久美子（1993 a）「コミュニケーションにおける「あれ」の用法と機能」『日本語教育』80 号　pp.195-196　日本語教育学会　〈3.2.2〉
迫田久美子（1993 b）「話しことばにおけるコ・ソ・アの中間言語研究」『日本語教育』81 号　pp.67-81 日本語教育学会　〈3.2.2〉
迫田久美子（1996 a）「日本語の指示詞ソとアの使い分けに関わる聞き手配慮について」細田和雅先生退官記念論文集刊行委員会（編）『日本語の教育と研究』pp.39-52　渓水社〈3.2.2〉
迫田久美子（1996 b）「指示詞コ・ソ・アに関する中間言語の形成過程―対話調査による縦断的研究に基づいて―」『日本語教育』89 号　pp.64-75 日本語教育学会　〈3.2.2〉
迫田久美子（1997 a）「中国語話者における指示詞コ・ソ・アの言語転移」『広島大学日本語教育学科紀要』第 7 号　pp.63-72　広島大学教育学部日本語教育学科　〈3.2.2〉
迫田久美子（1997 b）「日本語学習者における指示詞ソとアの使い分けに関する研究」『第二言語としての日本語の習得研究』pp.57-70　第二言語習得研究会　〈3.2.2〉
迫田久美子（1998）『中間言語研究―日本語学習者による指示詞コ・ソ・アの習得―』渓水社　〈3.2.2〉
佐々木泰子・川口良（1994）「日本人小学生・中学生・高校生・大学生と日本語学習者の作文における文末表現の発達過程に関する一考察」『日本語教育』84 号　pp.1-13 日本語教育学会　〈3.2.4〉
佐治圭三（1978）「誤用例の検討―その一例―」『日本語教育』34 号　pp.21-34 日本語教育学会　〈3.1.1〉
佐治圭三（1991）「誤用分析の一例」『日本語学』vol.10　2 月号　pp.26-33 明治書院　〈3.1.1〉
佐治圭三（1993）『外国人が間違えやすい日本語の表現の研究』ひつじ書房　〈3.1.1〉
佐藤修子・盧鳳俊(1993)「大連外国語学院日本語学部学生の日本語作文に見られる誤用」『北星学園大学文学部北星論集』30　pp.107-124 北星学園大学
佐藤正子（1984）「アメリカ人の日本語誤用例の問題点―初級段階の場合―」『講座日本語教育』第 19 号　pp.1-22　早稲田大学語学教育研究所　〈3.3〉
渋谷勝己（1988）「中間言語研究の現状」『日本語教育』64 号　pp.176-190 日本語教育学会　〈3.1.1〉
申　惠璟（1985 b）「第二言語としての日本語習得における「コ・ソ・ア」の問題」『言語の世界』2 巻　2 号　pp.97-111　〈3.2.2〉
スクータリデス・A.(1981) 「外国人の日本語の実態 (3) 日本語におけるフォリナー・トーク」『日本語教育』45 号 pp.53-62 日本語教育学会　〈3.4〉
鈴木忍（1978）「文法上の誤用例から何を学ぶか―格助詞を中心にして―」『日本語教育』34 号 pp.1-14　〈3.2.1〉
鈴木智美(1999)「意味的な誤用に見られる主な傾向―慣習的に定着した表現および類似の表現に関わる誤り―」『日本語学習者の作文コーパス：電子化による共有資源化』平成 8

年度～平成 10 年度科学研究費補助金（基盤研究(A)(1)）研究成果報告書（研究課題番号 08558020）pp.131-145　〈3.1.1〉
鈴木智美(2002)「2000 年度中級作文に見られる語彙・意味に関わる誤用―初中級レベルにおける語彙・意味教育の充実を目指して―」『東京外国語大学留学生日本語教育センター論集』28 pp.27-42 東京外国語大学留学生日本語教育センター　〈3.1.1〉
全　賢善(1994)「終助詞「ね」,「よ」の使い分けの原理―韓国語話者の誤用および非用から―」『平成 6 年度日本語教育学会秋季大会予稿集』pp.141-144　日本語教育学会　〈3.3〉
宋　晩翼(1989 a)「指示詞「コ・ソ・ア」の用法について―プロトタイプ論的な見方からの試案―」『広島大学大学院教育学研究科博士課程論文集』15 巻　pp.133-139 広島大学教育学部　〈3.2.2〉
宋　晩翼(1989 b)「日・韓指示語の対照研究(一)」『教育学研究紀要』35 巻　pp.142-147 中国四国教育学会　〈3.2.2〉
宋　晩翼(1990)「日・韓指示語の対照研究(二)―「コ・ソ・ア」と「i・ku・cho」の非現場指示及び「語形」について―」『広島大学大学院教育学研究科博士課程論文集』16 巻 pp.116-122　広島大学教育学部　〈3.2.2〉
宋　晩翼(1991)「日本語教育のための日韓指示詞の対照研究」『日本語教育』75 号 pp.136-152 日本語教育学会　〈3.2.2〉
滝沢直宏(1999)「コロケーションに関わる誤用―日本語学習者の作文コーパスに見られる英語母語話者の誤用例から」『日本語学習者の作文コーパス:電子化による共有資源化』平成 8 年度～平成 10 年度科学研究費補助金（基盤研究(A)(1)）研究成果報告書（研究課題番号 08558020）pp.77-89　〈3.1.1〉
田窪行則(1987)「誤用分析(1)－(7)」『日本語学』vol.6　4 月号 - 10 月号　明治書院　〈3.1.1〉
田中真理(1991)「インドネシア語を母語とする学習者の作文に現れる「受身」についての考察」『日本語教育』74 号　pp.109-122 日本語教育学会　〈3.3〉
田中真理(1997)「視点・ヴォイス・複文の習得要因」『日本語教育』92 号　pp.107-118 日本語教育学会　〈3.2.5〉
田丸淑子・吉岡薫・木村静子(1993)「学習者の発話に見られる文構造の長期的観察」『日本語教育』81 号　pp.43-54 日本語教育学会　〈3.2.5〉
田丸淑子・吉岡　薫(1994)「日本語発話資料分析の単位をめぐる問題―第二言語習得過程観察の立場から―」The Language Programs of The International University of Japan. Working Papers. Vol.5　pp.82-99 国際大学　〈3.2.6〉
多門靖容 (1987)「誤用分析と内省」『国語国文学』第 60 号 pp.46-68 名古屋大学
坪根由香里・坂田睦深(1996)「初級日本語学習者の順接・添加の接続表現における誤用の分析―パイロットスタディとして―」第 16 回第二言語習得研究会発表資料　〈3.2.5〉
坪根由香里(1997)「「ものだ」「ことだ」「のだ」の理解難度調査」『第二言語としての日本語の習得研究』vol.1　pp.137-156 第二言語習得研究会　〈3.2.4〉
土井利幸・佐々木嘉則(1987 a)「外国語習得の自然な順序に基づいた外国語指導を目指して

—P・J モデルの紹介—1」『英語教育』 6 月号　pp.43-45　大修館　〈3.6〉
土井利幸・佐々木嘉則(1987 b)「外国語習得の自然な順序に基づいた外国語指導を目指して—P・J モデルの紹介—2」『英語教育』 7 月号　pp.33-35　大修館　〈3.6〉
土井利幸・佐々木嘉則(1987 c)「外国語習得の自然な順序に基づいた外国語指導を目指して—P・J モデルの紹介—3」『英語教育』 8 月号　pp.29-31　大修館　〈3.6〉
土井利幸・吉岡薫(1990)「助詞の習得における言語運用上の制約—ピーネマン・ジョンストンモデルの日本語習得研究への応用—」『平成 3 年度日本語教育学会秋季大会予稿集』pp.27-33 日本語教育学会　〈3.6〉
中川正弘（1993）「作文の誤りと文体」『広島大学留学生センター紀要』3 広島大学留学生センター　〈3.1.1〉
中川正弘（1994）「作文と解釈行為」『広島大学留学生センター紀要』4　広島大学留学生センター　〈3.1.1〉
中川正弘（1995）「作文授業ガイダンスとしての作文経験調査」『広島大学留学生センター紀要』5　広島大学留学生センター　〈3.1.1〉
中川正弘（1995）「作文の添削と文体差」『広島大学留学生日本語教育』7　広島大学留学生センター　〈3.1.1〉
中川正弘(1999)「留学生の日本語作文データベース」『広島大学留学生センター紀要』9　広島大学留学生センター　〈3.1.1〉
中川正弘(2000)「スタイルから見る日本語文法」『広島大学留学生センター紀要』10　広島大学留学生センター　〈3.1.1〉
長友和彦・迫田久美子(1987)「誤用分析の基礎研究(1)」『教育学研究紀要』33 巻　pp.144-149 中国四国教育学会　〈3.1.2〉
長友和彦・迫田久美子(1988)「誤用分析の基礎研究(2)」『教育学研究紀要』34 巻　pp.147-158 中国四国教育学会　〈3.1.2〉
長友和彦・迫田久美子(1989)「誤用分析の基礎研究(3)」『教育学研究紀要』35 巻　pp.173-183 中国四国教育学会　〈3.1.2〉
長友和彦(1990a)「誤用分析研究：日本語の中間言語の解明へ向けて」細田和雅(編)『第二言語としての日本語の教授・学習過程の研究』平成元年度科学研究費補助金一般研究（B）研究成果報告書　pp.1-53　〈3.1.1〉
長友和彦 (1990b) 「誤用分析研究の現状と課題」『広島大学留学生センター紀要』第 1 号 pp.23-40 広島大学留学生センター　〈3.1.1〉
長友和彦(1991)「談話における「が」「は」とその習得について—Systematic Variation Model—」『日本語シンポジウム：言語理論と日本語教育の相互活性化予稿集』pp.10-24 津田日本語教育センター　〈3.2.1〉
長友和彦(1993)「日本語の中間言語研究—概観—」『日本語教育』81 号　pp.1-18　日本語教育学会　〈3.1.1〉
長友和彦・法貴則子・初鹿野阿れ・登里民子・井内麻矢子・高橋紀子・広利正代 (1993)「縦断的第 2 言語習得研究：初級日本語学習者の中間言語」『平成 5 年度日本語教育学会春

季大会予稿集』 pp.149-159 日本語教育学会 〈3.1.1〉
長友和彦(1997)「動詞テ形に関わる音韻規則の習得と言語の普遍性」『第二言語としての日本語の習得研究』1号 pp.1-8 第二言語習得研究会 〈3.2.3〉
新村朋美(1992)「指示詞の習得―日英語の指示詞の習得の対照研究」『早稲田大学日本語研究教育センター紀要』第4巻 pp.36-59 早稲田大学日本語研究教育センター 〈3.2.2〉
西村史子(1998)「中級学習者が書く詫びの手紙における誤用分析―文の適切性の観点から―」『日本語教育』99号 pp.72-83 日本語教育学会 〈3.4〉
ネウストプニー・J. V. (1981)「外国人の日本語の実態 (1) :外国人場面の研究と日本語教育」『日本語教育』 45号 pp.30-40 日本語教育学会 〈3.1.1〉
野沢素子 (1985) 「中国語話者の作文における誤用例より (I)」『日本語と日本語教育』13号 pp.15-33 慶応大学語学センター 〈3.3〉
野沢素子 (1986) 「中国語話者の作文における誤用例より (Ⅱ)」『日本語と日本語教育』14号 pp.17-31 慶応大学語学センター 〈3.3〉
菱沼 透(1980)「中国語と日本語の言語干渉―中国人学習者の語用例―」『日本語教育』42号 pp.58-72 日本語教育学会 〈3.3〉
廣利正代 (1993)「初級日本語学習者の表現力―接続表現・文構造の発達過程―」第一回第二言語習得研究会合同研究会発表資料 〈3.2.5〉
馮 富栄 (1994)「日本語使役文の学習過程における母語 (中国語) の影響について」『教育心理学研究』42－3 pp.81-90 日本教育心理学会 〈3.3〉
藤森弘子 (1995)「日本語学習者に見られる「弁明」意味公式の形式と使用―中国人・韓国人学習者の場合―」『日本語教育』87号 pp.79-90 日本語教育学会 〈3.4〉
細川秀雄(1990)「フランス人の日本語作文における誤用とその種類」『金沢大学教養部論集人文科学編』27(2) pp.119-160 金沢大学教養部 〈3.3〉
堀口純子(1979)「作文における誤用例の場面による分類」『日本語教育』37 号 pp.103-116 〈3.4〉
町田延代(1997)「電話におけるフォリナー・トーク・ディスコースの違い―日本語非母語話者の言語能力と交渉―」『第二言語としての日本語の習得研究』1号 pp.83-100 第二言語習得研究会 〈3.4〉
松田由美子・斎藤俊一(1992)「第二言語としての日本語学習に関する縦断的事例研究」『世界の日本語教育』第2号 pp.129-156 国際交流基金日本語国際センター 〈3.2.1〉
水田澄子(1995)「日本語母語話者と日本語学習者(中国人)に見られる独話聞き取りのストラテジー」『日本語教育』87号 pp.66-78 日本語教育学会 〈3.4〉
水谷修 (1987)「外国人の日本語談話行動における誤用の研究」『日本語の特性と機械翻訳』PP.72-82 第1回「大学と科学」公開シンポジウム組織委員会 〈3.4〉
水谷信子(1984) 「誤用分析(1)－(6)」『日本語学』vol.3 4月号 - 9月号 明治書院 〈3.1.1〉
水谷信子(1985)『日英比較 話しことばの文法』くろしお出版 〈3.4〉
御舘久里恵(1997)「日本語母語話者の接触場面におけるフォリナー・トークの諸相―非言語行動を含めた談話過程の観察から―」『日本語教育学会秋季大会予稿集』pp.185-190

日本語教育学会　〈3.4〉
峯　布由紀(1995)「日本語学習者の会話における文末表現の習得過程に関する研究」『日本語教育』86 号　pp.65-80 日本語教育学会　〈3.2.4〉
宮崎茂子(1978)「誤用例をヒントに教授法を考える」『日本語教育』34 号　pp.47-56　日本語教育学会　〈3.1.1〉
宮崎茂子•新屋映子(1985-6)「誤用分析(1)－(6)」『日本語学』vol.4　11 月号－vol.5　4 月号　明治書院　〈3.1.1〉
村岡英裕 (1992) 「実際使用場面での学習者のインターアクション能力について：「ビジターセッション」場面の分析」『世界の日本語教育』第 2 号 pp.115-127 国際交流基金日本語国際センター　〈3.4〉
村上かおり(1997)「日本語母語話者の『意味交渉』にタスクの種類が及ぼす影響―母語話者と非母語話者とのインターアクションにおいて―」『第二言語としての日本語の習得研究』1 号　pp.119-136　第二言語習得研究会　〈3.4〉
メイナード・泉子(1993)『日英対照研究シリーズ(2)会話分析』くろしお出版
森田良行(1983)「誤用分析(1)－(6)」『日本語学』vol.2　6 月号 - 11 月号　明治書院　〈3.1.1〉
森田良行(1985)『誤用文の分析と研究―日本語学への提言―』くろしお出版　〈3.1.1〉
山田伸子(1992)「買い物場面のインターアクション―店員の販売行動を中心に―」『日本語教育』77 号　pp.116-128 日本語教育学会　〈3.4〉
葉照子(1990)「初級日本語学習者における「ノダ」の使用例からみた誤用の類型について」『九州大学留学生教育センター紀要』第 2 号 pp.171-183 九州大学留学生教育センター　〈3.2.4〉
横田淳子(1986)「ほめられた時の返答における母国語からの社会言語学的転移」『日本語教育』58 号　pp.203-223 日本語教育学会　〈3.4〉
横山杉子(1993)「日本語における「日本人の日本人に対する断り」と「日本人のアメリカ人に対する断り」の比較」『日本語教育』81 号　pp.141-151 日本語教育学会　〈3.4〉
吉岡薫（1999）「第 2 言語としての日本語習得研究―現状と課題―」『日本語教育』100 号　pp.19-32　日本語教育学会
吉川武時(1978)「誤用例による研究の意義と方法」『日本語教育』34 号　pp.15-20 日本語教育学会　〈3.1.1〉
吉川武時(1982-83) 「誤用分析(1)－(6)」『日本語学』vol.1 11 月号-vol.2 4 月号　明治書院　〈3.1.1〉
吉田妙子（1994）「台湾学習者における「て」形接続の誤用分析―『原因・理由』の用法の誤用を焦点として―」『日本語教育』84 号　pp.92-103　日本語教育学会　〈3.2.3〉
吉光邦子 (1981) 「外国人の日本語の実態 (4):外国人学習者のアクセント」『日本語教育』45 号 pp.63-74 日本語教育学会　〈3.5〉
刘(ﾘｭｳ)淑媛 (1984)「中国人学習者によく見られる発音上の誤りとその矯正方法」『日本語教育』53 号 pp. 93-101 日本語教育学会　〈3.5〉

渡邊亜子(1992)「日本語学習者の談話における視点―ストーリーテリングによる調査の分析―」『日本語教育学会創立 30 周年・法人設立 15 周年記念大会予稿集』pp.73-78　日本語教育学会　〈3.4〉
渡邊亜子(1995)「中国語母語話者の日本語受身文の使用実態とその背景―母語との対照からの仮説設定―」『言語文化と日本語教育』9 号 pp.218-228　お茶の水女子大学日本言語文化学研究会　〈3.3〉
渡辺恵美子(1994)「日本語学習者のあいづちの分析―電話での会話において使用された言語的あいづち―」『日本語教育』82 号　pp.110-122 日本語教育学会　〈3.4〉